
HUNTERS

グリコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTERS

【Nコード】

N4199B

【作者名】

グリコ

【あらすじ】

世界で何が起きているか——あのころの俺には、知る由もなかった……

第一話：出会い

…暗い場所。とてつもなく、暗くて恐ろしい——…

そこで二人の男が話していた。

『…本当に良いのか、人間』

『ああ。こんな体でいるよりも、キミ達のような強靱な肉体の方がよっぽど良い』

男は悲しそうに手を振ってみせた。

『ならば』

もう一人が、嬉しそうに笑った。

H u n t e r s . . .

「むん！」

道場全体が揺れるほどの衝撃の後、スベスベとした床に転がる男を

見下しながら、俺ははだけた胴着を整えた。

「…受身ぐらい取ってくださいよ先輩」

「……大和^{ヤマト}、お前いつの間にそんなに上手くなりやがった」

その言葉に心の奥がムズムズしてくるのを感じた俺は、汗を流すため道場の隅の手洗いに向かった。道場では誰かの体が床に打ち付けられる度にドスンという大きな音が響いている。

つっかけを履き、道場の裏へと回ると、ふと練習を覗きこむ一人の少女が居た。少女の隣には、背の高い青年。二人は黒い制服のようなモノを纏っていた。服はまだ許せたが、一般人と違うのは、その容姿だった。少女はフワフワとしたゆるいウェーブを描く茶色の髪に、人形のように長い睫毛。そして——ルビーのように澄んだ紅い瞳。青年の方は少しオレンジがかったブロンドの髪に、利発そうな目鼻立ちをしている。いち早く俺に気づいたのは青年の方で、その青い瞳を曇らせた。

「……」

「……」

俺は警戒しながら、尋ねた。

「何か、御用ですか」

やっと俺に気がついた少女は、やや興奮気味に言った。

「ここは、何なんなんだ？何かの訓練所？」

「……」

訓練所…まるで兵隊ではないかと暫し混乱したが、成る程——ようやく俺は彼らが日本人でないことに気がついた。

「ここは道場です」

「どーじょお？」

少女があまりにも間の抜けた返事をするので、洗い場の蛇口を勢よく捻った。

流れ出た水が、タイルの上でバシャバシャと鳴った。

「…道場です。柔道をする場所のこと」

「じゅうどう？ああ、それは聞いたことがある。フランスに行った時、結構みんな話していたから…」

思わず顔を洗う手を止め、少女を見た。フランス…？

するとその話を遮るように、青年が口を開いた。俺を威嚇するような圧力を放っている。

「——ケイト。もう行こう。こんな所で時間を食って、奴らを野放しにさせる気か？」

それを聞いた少女は肩をすくめる風な仕草をしてみせた。

「大丈夫だよ、クリス。あいつらは日本ではまだあまり動いてない、それに折角世界を回っているんだ。いろんな文化をみないでどうす

る？」

俺は二人から発せられる『あいつ等』という言葉に違和感を感じたが、かまわないで顔を拭いた。

少女の名前は、ケイトって言うんだ。やたら言葉使いが男らしい子だな……それで男の方はクリスか……やっぱ外国人だ。

すると、裏口が開いて、先輩が出てきた。どうやら先輩も顔を洗いに来たらしい。

「……ん？何だ。——お客さん、か？」

二人を見た先輩は、慌てて聞いた。道場は最近入門者が減ったいるので、先輩は興味が沸いた人なら誰でも勧誘する。それに先輩は鈍いところがあるから、二人の容姿はあまり気にしていないみたいだ。クリスが益々苛立ちのオーラを発した時、ケイトはシメタとばかりに言った。

「ああ」

「なら道場の中で待っていて下さい。今準備をさせますから……オイ大和！胴着を2着用意しろ！」

「……」

嬉しそうに道場の中に入っていくケイトとは裏腹に、先輩をにらむクリスから殺気のようなモノが出たのは。気のせいだろうか……

「……貴方の、お名前は？」

興味津々とはかりに視線を泳がせていたケイトに、俺は尋ねた。胴着姿になった彼女は、驚くほど華奢なのが分かった。クリスは反対に着痩せしていたのだろう、胴着を着るとガツチリして見えた。しかしやはり髪の色が髪の色だけに、二人とも胴着はあまり似合わなかった。まず先輩は仏頂面していたクリス呼び、体験練習を始めた。

「…人に名前を聞くときは、自分から名乗るのがルールだ」

ケイトがそう答えた時、先輩が床に叩きつけられた。ドシン！と音が響き、俺は型がまっなくなっていないにも関わらず先輩を投げ飛ばしたクリスの強さにも驚いたが、いやいや俺でも出来たのだからと考えなおし、会話を続ける。

「…ではルールに則って…俺の名前は林 ハヤシヤマ 大和。それで、貴方のお名前は？」

するとケイトはあからさまに怪訝そうな顔をした。先ほどはあんなにはしゃいでいたのに、どうやらこの子は、知らない奴と話すのは嫌いらしい。

「…グレイス・ケイト」

「——何歳？」

「16。お前は？」

「あ、同い年。俺も16!」

自分と同じ年だと分かり、微妙な敬語を使う必要がなくなる。

「…学校に、行ってるのか?」

少し気後れ気味のケイトは、モソモソと言った。

「ああ。もちろん。…あゝ…ケイトは?」

「私は行っていない」

きつぱりと、彼女はそう告げた。顔つきが、幾分険しくなった。

少しの沈黙の後、先に口を開いたのはケイトだった。

「大和。ここで会ったのも何かの縁だ。もし…また会うことがあったら、その時はよろしく」

そうやって差し出された手を、急いで握り返す。何か意味ありげなこの言葉の真意が分かるのは……もう少し後のことだ。

「よろしく」

ケイトを真正面から見て、ドキドキしない男はいないだろう。彼女が笑うと、まるで花が綻ぶ時のような美しさと儚さがあった。しばらくの間、俺は惚けていたが、また組み合っているクリスと先輩に目を戻した。

すると遂にその瞬間はやってきた。先輩がクリスの足を取り、瞬間、

クリスの胴着が少しはだけ、首にかけている蒼いペンダントのようなモノが見えた。そしてクリスが床に叩きつけられた振動に合わせて、それが振り子の様に揺れた瞬間。

——ドクン。と、俺は体が妙な気配に包まれるのを感じた。

背筋が凍りつくような、ザワザワとした冷たい何かが、体の奥を突き抜ける…

「…どこだ!？」

奇妙な体験から俺を呼び戻したのは、ケイトの雄々しい怒声だった。ハツとして、辺りを見回す。目の前には、立ち上がって辺りを探るケイトと、同じく厳しい表情で何かを探るクリスの姿があった。先輩は何のことかさっぱりらしく、呆氣にとられている。

俺は頭を何度も横に振り、一息ついた。今の妙な感じは一体…

すると只ならぬ気配の二人は道場の裏から出て行った。恐らく、何かを話合つために。

——俺はゴクリと唾を飲んだ。

絶対に話を聞かない方がいいのは、分かってる。だけど、先ほどの妙な感触が、体に染み付いて離れない。知りたい。何が、起きたのか…… 結局、俺は道場裏が見える小窓に張り付き、何とか二人の会話を聞き取れないか試みた。凄まじい地獄耳を発揮する。

「…ケイト…今の…」

「ああ…間違いなく、凄く強いエネルギーを感じた…あれ程強力なエネルギーを発せられるのは、Aクラス以上のMAのみだ」

「……だから言っただろう。『ジユウドウ』等している暇はないと」

「…今その話をしてもし方がないだろ。それにあのエネルギーは一瞬で消えてしまった。どういう訳なのか、分からない———だけどこの近くにMAが居るのは確かだよ。情報は間違っていないかった。一刻も早く見つけ出して処理しよう」

「…よし」

何の話をしているのか全く分からなかったが、『MA』『エネルギー』等という単語は聞き取れた。しかしそれらから何かを知るといふのは無理な話で…俺は先ほどの寒気にも似た感触はいつたい何だったのかと首を捻った。

「ところで」

声の調子が変わった。

「そこで盗み聞いているのは誰だ？」

凄く近くでケイトの声がした。彼女は一瞬で俺が張り付いている小窓まできていた。

「…あ」

「…大和。今の話を、聞いたのか？」

ケイトは、気が進まない様子で言った。

「——まあ、その……さっきの気配が何か、知りたくて」

すると俺が盗み聞いていたと確信したクリスは、獲物をとつちめたライオンみたいに自信たつぷりに言った。

「…規約では『M A』の話を知った者には必ず『H U N T E R S』に関わる仕事に就かなくてはいけない。お前はこれから俺たちと一緒に来てもらう」

「……は、はんたーず？」

やつぱり、盗み聞きなんてするものじゃない。俺は背筋に冷たいモノが流れるのを感じた。

「ああ。とにかく、来るんだ。…残念だったな」

少しばかりの嘲笑を含んだクリスの言葉に、何がだよ、と言い返したかったが。…あつという間に二人は道場の中に戻って行った。

「少し席をはずしてもらえますか？」

ケイトが先輩にそう言うと、先輩はおずおずと部屋から出て行った。パタン、とドアが閉まる音がする。ここは道場の一角にある休憩室。くすんだ皮のソファが2つに、木の机があるだけの狭い部屋だ。簡

易コンロの上で、やかんがシューシューと白い蒸気を吐き出す度に、蓋がカタカタと音を立てた。

「…やっと向こうに行った」

クリスが忌々しそうに呟いた。恐らく俺と同じように盗み聞くために張り付いていた先輩の気配が、今しがたドアの向こうから消えたのである。

出来立てのお湯で沸かしたコーヒ―三人分が、木の机に置かれる。俺はケイトとクリスと向かい合うように座り、暫し無言のままコーヒ―を啜った。まるで部屋の空間に、俺達三人以外の生物が入る隙間がないという風に、空気は張り詰め緊張していた。

「……フウ……」

ケイトは、4回目のため息で億劫そうに口を開いた。

「まず…貴方に、能力があるかどうか見分けなくちゃいけないんだけど――」

「能力？」

ふとももの上に手を置いていた手を、固く握る。

「ああ、…多分、いいやきつと――私は貴方には能力があると思う。だって、さっき気配を感じたのだろう？」

「…気配というか、何か妙な感じがした」

そう。気配等というほど――そんな立派なものじゃなかった。ただ、

あやふやにはつきりと何かを感じたんだ。

「そうか…だけど、普通の…能力を持たない人は何も感じない。あの…先輩という人は、何が起きたのかすら分かっていなかっただろう？ あれは能力がないモノのする行動だ」

「だが」

目を閉じ静かにコーヒーを啜っていたクリスが、断固とした口調で遮った。

「この男が『本当』に気配を感じたのか、調べる術はない。もしかしたら、好奇心のために口から出任せを――」

「違う！」

叫んだ俺に、部屋は波打ったように静かになった。二人の視線が、突き刺さる。

「出任せなんか言わない。それに好奇心で、あんなこと…」

「…もういい。私はお前を信じるよ大和」

そう聞こえた方を向くと、柔らかに微笑むケイトの顔があつた。

「クリス、お前の方こそあまりデタラメを言うな。大和が私たちに嘘をついてなんのメリットがある？」

咎める様にそう言ったケイトに、クリスは目を見開いた。そして今の言葉が本当なのに確かめるように、何度も瞬きをした。

「…大和、お前には今から私たちと共に本部へ行つて貰う。そしてそこで隊長と会い、能力を確かめて貰え。そこから全てを話そう」

いつの間にかカップの中身がなくなっていた。少しばかり残ったコーヒーを眺め、俺はふと窓を見た。雲ひとつない、青空だった。

第二話：覚醒

友達だとか、親だとか。そういう人に何も告げられないまま、俺は二人に道場近くの廃れた公園に連れ出された。

「ちょ… ちょっと待て！」

「何だ？」

ガツシリとしたクリスの腕に、脇を抱えられ俺はもがきながら言った。公園を囲む様に植えられている木々が別れを惜しむようにザワザワ鳴った。

「いくらなんでも早すぎる。もう少しゆっくり事を進めても——…痛ッ！」

言葉を遮るように捻り上げられた腕を庇うように体を振る。背後の男は、怒りを静めるかのように、わざと静かに言った。

「我々の仕事は、そういう… 悠長なモノではない！」

——ダメだ。痛い。とてつもなく、痛い…… 思わず、奥歯を噛み締めた。

「クリス…！ 気持ちは分かるけど… 少し落ち着いて。さっきから… 幾らなんでも相手は素人よ」

心なしか先ほどより女口調になったケイトの説得を聞き、捻り上げられた腕が元に戻った。肺に溜めていた息を吐き出す。

「はあ……」

何でこんな目に……意味が分からない。

「……なあケイト。公園なんかに来て、どうするつもりだよ？」

「すぐに分かる」

だからもう黙れとばかりにその切れ長の紅い目で俺を睨んだケイトは、無言のまま空を見上げた。ちっとも動かない腕に半ば諦めかけていた俺は、その様子を眺めるしかなかった。すると彼女は手を空に翳すようにして呟いた。

「『我がヴルブ——赤の両翼を持つ偉大なる竜王よ。今その姿を現せん』」

すると次の瞬間、公園の中心——ケイトが立っている場所から、突風が吹き荒れた。何かの超音波のような耳鳴りと、刃のように鋭い突風。目を堅く閉じても防ぎきれないそれに、俺は思わず息が詰まった。

そして……突風が止むと共に、目の前の光景にまた息が止まった。

「……嘘だろ……」

そこには、古来より幻想……架空の生き物とされてきたドラゴンが居た。

紅い……ドラゴンは全身がケイトの瞳と同じ色の鮮やかな赤で、目だ

けが威圧感を放つ黄色に染まっていた。

少し開いた口からは、蒸気の吹き出る時の『シュー……』という声が規則正しく出ている。

人っ子一人居ない廃れた小さな公園一杯に広がるドラゴンの両翼。ケイトはドラゴンの鼻を愛しむ様に撫でると、コチラを向いた。

「クリス。大和を連れて早く乗って。一般人が来たら面倒な事になる」

「ああ。…早く来い。無駄な抵抗はするな——」

グイグイと肩を押され、ドラゴンに近づく。するとドラゴンはその黄色い目をクルリと回転させ、俺を見据えた。

「大丈夫だよマイン、この人は貴方の敵じゃない——」

諭す様にドラゴンの羽を一撫でしたケイトは、俺を睨むと棘棘しく肩を押した。

「ちょっと待て…まさかこの——」

「マイン？」

「そう、マインに乗ってその『本部』とやらに行くのか？」

「当たり前でしょさあ早く。無駄口を叩くとその分時間をロスする」

最後に竜の胴体に足を下ろして、俺はケイトとクリス両方に挟まれ

る形になった。

「い、一般人にはれないのか？」

「…空に飛び出せばマインは姿を消せる。さあ、早く……っと。忘れるとこだった」

そう言うときイトは懐からハンカチのようなものを取り出した。

「本部の場所はトップシークレットなんだ。少しの間、目隠しさせてね」

ニツコリと微笑んだその笑顔が、心なしか怖かった。

高い場所から落下するような独自の浮遊感がして、次に突風が吹き荒れた。背後のクリスに抱えられるようになり、屈辱を覚えるが耐えた。靴の底に質量を感じるから、少なくともどこかの陸地に着いたらしい。

「着いたよ。降りて！」

「まったく——乱暴すぎだろ……」

文句を言ったためクリスに腕を捻られながら、目隠しを外されると、思わず眩しさに目を瞬かせた。太陽の光が全反射して、一瞬視界が真っ白になった後ようやく目が慣れてきた。

「……ここ、どこだよ？」

見渡す限り、緑。茶。緑。茶。空を仰げば突き抜けるような青……だった——…

「こっち、着いてきて」

そう言つて、早足で歩き始めたケイトを追う。先ほどのマインとかいうドラゴンは、どこかに消えてしまった。茶色の湿った土を踏みしめ、泥がスニーカーに散るのを見ながら、俺はなんとか今の状況を理解しようとした。

「……あのさ」

思つたよりも声が細いのに驚いた。

「何？」

先頭を歩くケイトは、少しだけ振り返つた。

「ハンターズって何なんだ？」

「だからまだ教えられないって——」

俺の質問に失望したかのように項垂れると、また彼女は前に向き直つてしまった。

「なんだよ！なら、何で俺は連れてこられたんだよ。意味わかんね

えよ！」

「……」

声を張り上げた自分にまた驚いた。なんだろう——恐怖、じゃない。何か違う…苛立ちが募ってくる。

「脆い、な」

ポツリと空中に漂った声の主を振り返ると、クリスが苦虫を噛み潰したような表情で俺を睨んでいた。周りの木々を通り抜ける風は、ヒンヤリとしていた。

「故郷を離れてからたかが30分たらずでホームシックか？そんな軟弱な神経でこれからの戦場を切り抜けれるとでも——」

…ホームシック？

いや、意味わかんねえだろ——ふと、脳の回線が大渋滞を起こしかけた瞬間、木々の間から獣が現れた。

そう、獣だった。黒い狼がそのまま巨大化したかのような、獣。視界がショートしたかのように、俺は混乱状態に陥った。

「——っ！！」

獣は、真っ直ぐに俺に向かってきた。まるでケイトやクリスなど視界に居ないかのように、一心に俺に向かってきた。後ず去ろうとしても、余りに急な出来事に足が纏れて泥の上に倒れた。

「うわ…っ」

死ぬ事を覚悟する暇もなく…ガッン！と音がして、獣は俺の体の上にのしかかっていた。

突き出た鼻が、俺の鼻が接触するほどの距離で迫ってくる。

「――」

『…よう、小僧。お前の实力はこんなもんか？』

目を瞑ったとき、どこから頭の中に声が流れ込んできた。楽しげな、それはまるで友達とじゃれあう子供のように無邪気な声だった。するとその声を聞いた瞬間、俺はカッと全身の血流が早くなるのを感じた。

「うああ！」

気がつくと、獣を跳ね飛ばしていた。いや、跳ね飛ばしたのは俺ではない。かといってクリスやケイトではない。ならば、誰が…

『親愛なる我が主人よ。命をお下してください』

目の前に、光の粒子を帯びたライオンが居た。

第三話：始まり

「な…何？」

ライオンを見て初めに口を開いたのは俺ではなくケイトだった。

「…クツ…アハハ！」

すると目の前で唸っていた獣は急に笑い出して、次に光った。

「思ったとおりだ、この小僧。素質がある」

獣は…男になった。堀の深い顔立ちに、短く無造作に跳ねた黒髪。ガツシリとした肩幅に高い背。そしてケイトやクリスと同じ黒い制服。

男は、尻餅をついた格好で固まっていた俺に手を差し伸べた。

「俺の名前はロイス・ターキン。お前は？」

「ハヤシ林 ヤマト大和」

「そうか…ヤマト。確か…日本の、戦艦の名前だよな。いい名前だ」

「…」

手を握り、フツと笑みを漏らした。この男は、何か人懐こさというか温かみに包まれている。

ようやく俺は少し安心した。すると目の前で雄雄しく立っていたライオンは一瞬で消えてしまった。

「それはそうと…ケイト。クリス。日本での任務は完了したのか？」
尻についた泥をはらいながら、男に名指しされた二人のほうを盗み見た。命令口調…この男、偉い人なのか？

「ハイ…もちろんです、隊長。しかし…後で少しお話をする事が」
ケイトは地面に目線を落とした。それを見た男は、こめかみを指で掻きながら気楽そうに言った。

「ん、分かった。で——小僧、じゃなかった、大和！こつちだ、来い！」

隊長…何かの偉い人だと分かって、また俺は少し緊張した。

森を歩いていくと、急に頑強な塀に囲まれた灰色の建物の一部が現れた。背の高い木々に囲まれて、今まで見えなかった。

建物を囲む塀にはどこにも入り口らしき場所はなかった。どこから入るのだろうか？とキョロキョロしていると、正面に何か小さいセンサーのような突起部位があるのを見つけた。ロイスがその目の前に立つと、センサーから声が発せられた。

『——合言葉を』

「ウルブ」

まるで常識を聞かれた大人のように、ロイスは億劫そうに言った。

『…認証しました。次にアイ・センサーを起動します』

すると機械は突起した部位がさらに持ち上がり二対の細い金属が出てきた。その二股の金属はロイスのこめかみをそつと押さえ、中心から発せられる赤い光線をロイスの目元に当てた。

『…認証しました。団員ナンバー1、ロイス・ターキン隊長。本部へお入りください』

「どーも」

ガラガラと扉が開き、ロイスはズコズコと入っていった。俺は扉の中に入った瞬間、その巨大さにため息が出た。

見えていたのは本当に建物の一部だったらしく、扉は恐らく何ヘクタールもある建物を囲うように永遠と続いていた。

「素質があると分かったからには、もうそろそろ話してもいいだろう？」

応接間のような広い部屋で、ロイスは尋ねた。

フカフカの白いソファにロイスと共に座っているケイトは深く頷き、クリスは窓の縁に座って空を見上げていた。その端正な横顔は、男でも見惚れる程であった。俺は沈み込むソファに少し嬉しくなった。

「では…何から聞きたい？大和」

「…ここはどこですか？」

それが、まず最初に聞きたい質問だった。日本からどれだけ離れた位置に居るのだろうか…

「ここは、リノ島。世界地図には描かれていない、秘密の孤島だ」

「リノ島…」

「リノ島は太平洋のほぼ真ん中に位置する。どこの陸地からも遮断されていて…ハンターズの団員しか知りえない孤島だ」

「太平洋の真ん中！？」

そんな孤島に、先ほどまで普通の日本の高校生だった俺が居る等…到底納得できるわけなかった。

「ああ。まあ…嘘か本当かは時期に分かる」

不満そうな俺の表情を汲み取ったのか、ロイスはニヤリとして言った。

「……じゃあ、ハンターズって何ですか？」

何度も会話に出るその言葉。知らないなんて分が悪すぎる…俺は口を尖らせた。

「…ハンターズが、何か…か」

しみじみとした口調で、ロイスはケイトと視線を合わせた。部屋の中が、独自の静けさに佇んだ。

「…？」

「ハンターズとは、一言で言えば『死に囚われた者の集団』」

——ドキリ、とした。死なんて言葉…何年ぶりに意識しただろう。俺を可愛がってくれた爺さんが…亡くなってからか……

「大半の団員が『MAに大切なモノを奪われた』という理由でハンターズに入っている。他に能力のあるものが居れば、我々は世界中からスカウトしてくる」

なんだか、恐ろしい理由だと思った。

「そう、なんですか。…では、その…MAというのは一体…」

「MAが何かを知りたいならば、身をもって知ることだ！」

カチャ、という音がして持っていたカップを机に押し付け、ロイスは言った。鋭く細い目に怒りがこみ上げているのが分かる。

「……悪い。他に何か聞きたい事はあるか？」

「ありません」

ロイスがソファから立ち上がったのが合図のように、クリスとケイトも立ち上がった。

「そうか。なら、お前には今日から寮で生活してもらう。相部屋は…ケイト、頼む」

「ハイ」

ケイトは素早く上がり俺を見て、微笑んだ。俺は心臓が高鳴るのを感じた。この子と…同じ部屋で暮らすのか…？

「大和、くれぐれも勘違いするなよ」

それを察知したクリスはケイトと俺の間にその体を割り込ませた。

「俺が、お前らの部屋の鍵持ちだ」

「……」

甘い話には裏がある、か。

第四話：自分を知る者

「こつち」

長い廊下は全てフワフワしたベージュ色の絨毯で覆われていた。泥のついたスニーカーでそれを汚すのを忍びないながら、俺は颯爽と歩くケイトを追いかけた。

「この建物は本部で、私たちが衣食住するのは違う建物。ああ……ちようどこの窓から見えるよ。あの——少し見えにくいけど、クリーム色の建物……分かる？」

そういつて、廊下の壁を切り取るように開けた窓から外を見る。青い空が広がって、その下には広大な森が広がっていたが、今居る場所からそう遠くないところに建物が見えた。

「何で一緒に建物にしないんだ？」

「……M Aが攻めてきたとき、出来るだけ被害を拡散するためだ」

背後に居たクリスが、忌々しいとばかりに質問を一蹴した。

「……成る程」

「他にも敷地内にはいろんな施設がある。たぶん、大和に係るのは『訓練所』と『食堂』。それに……貴方、勉強とかする？」

「しない」

「そう、なら今言った二つだけね。『図書館』は必要なさそう」

窓に張り付いていたケイトは、こちらを見て微笑んだ。最初であった時は、あんなにも無愛想だったのに……本当はよく笑う子なんだと、思った。

「寮には渡り廊下で行ける。早く行こう」

しばらく歩くと、分厚い円形の扉が現れた。鉄格子があり、さらにその奥に鉄の扉が幾重にも重なっている。

「ここまでする必要があるのかよ？」

俺の呑気な声が、やけに響いた瞬間、グイッと体が引つ張られ、目の前にクリスの青い瞳が見えた。恐ろしいまでの目力と、鼻と鼻とくつつくほどの距離に俺は怯んだ。

「大和——お前はまだMAを知らないからそんな事が言えるんだ。そんな呑気な状態で……もし今AクラスのMAでも現れたら、一番先に死ぬのはお前だ」

「……！！」

バサツと胸倉を離され、俺はよろけた。ケイトは心配そうにこちらを見ていたが、やがて鉄格子の隅のセンサーを解除した。恐らく認証したら鍵が出てくるシステムになっているのだろう。ふいに出てきた鍵をケイトは素早く受け取り、俺達は鉄格子を通過した。

やがて最後の鉄扉を開け、渡り廊下を渡りきる。するとまず最初に団員の名前と部屋番号が書いてある板が現れた。見慣れない英語表

記の横に、さまざまな国の言葉で名前が訳されていた。もちろん日本語もあったので、俺は団員の名前を知ることが出来た。

さらに廊下を進むとホールの様な場所に出た。あちらこちらで、知らない人間——恐らく団員であろう黒い制服を纏った連中がコチラを興味深々とばかりに見ている。

すると先頭に行くケイトが立ち止まった。覗き込むと、クリクリした目が特徴的な可愛らしい子供がケイトに抱きついていた。

「ケイト！お帰りなさい」

「ただいま、シュラ」

ケイトにやわらかく頭を撫でられ、猫のようにゴロゴロとした後、子供は俺に気がついた。その大きな目で俺を頭から足までを見回した後、シュラはクスリと笑った。

「…あんだ、誰？」

——このガキ。こめかみに力が入り、拳が自然に固まる。

「シュラ…そんな口聞いちゃダメでしょ？この人は林^{ハヤシ} 大和^{ヤマト}つていって、日本から私とクリスがスカウトしてきたの」

「ふうん…」

納得できないとばかりに俺を見た後、シュラはクリスを呼び寄せた。耳打ちをしても、時々俺の方を見てニヤリとするので、何を話して居るのかは大方想像がついた。嫌味なガキも居たもんだ、と苛

立ちながら、奥に進んでいくケイトを追いかける。

「さっきの子供はいつたい…」

「あの子はシュラ・マーチス。シュラは昔から口が悪いの。根はい子だから——仲良くしてあげてね。それにあの子も私たちと同じ部屋よ」

「へえ……」

…ん？待てよ…

「つて、その話からすると——あの子供も、団員なのか!？」

突然の大声に耳をふさぐような仕草をした後、ケイトは迷惑そうに俺を睨んだ。

「うるさいな…無駄なエネルギーを使わない方がいいと思うよ。それに…団員に入るのに年齢制限はないわ。分かった？」

「いやいや…普通分らない。というか子供を働かせるのは何かに付けて問題だろ…。という言葉が喉まで出掛かったが、怪訝そうに眉間に皺を寄せるケイトを見て飲み込んだ。

「…着いた。私たちの寮はここだから」

そう言われて見た先には、『5号室：鍵持ち…クリストフ・フランズ（A）相部屋…グレイス・ケイト（A）シュラ・マーチス（C）』と描いてある小さな木の札が壁に打ち付けられていた。本部に比べて壁はボロイし、何やらドアは締まりが悪いようで少し開いていた。

「…お邪魔しまーす」

「…今日からここは貴方の家みたいなものだから、わざわざ挨拶しなくていいと思うけど？」

ここでは日本みたいに玄関では靴を脱がないらしい。そのままズコと上がると、中は思ったより広々としていた。ちゃんと清潔に保たれたキッチンに、あまり生活感のないリビング。そして4つの扉。扉にはそれぞれ部屋の主の名前を描いた札がかけてあった。

「大和の部屋は一番奥ね。誰も使ってないから、綺麗なはず」

指差されて、窓の陽が差し込み暖かそうなドアの前に立つ。ゆっくりとノブを回すと、木が軋む独自の音と共に埃っぽい空気が肺に流れ込んできた。思わずむせる。

「ゲホッ！ゲホッ！…う」

堰を聞きつけたケイトは部屋を覗き込んで啞然とした。

「……」

涙がにじむ視界を擦り、部屋の中を確認すると、部屋の中はわけのわからない玩具で一杯だった。しかもそれらは片付けられず、まるで盗賊に入られたかのように散乱していた。

「どうして…あ」

ケイトは部屋に入り壁に手をやった。訳が分からず俺は喉をさすっ

ていると、ケイトは鬼気迫る顔つきで部屋から出て行った。あまりの迫力に俺は一時停止していると、すぐにどこから子どももの泣き声がしてきた。

「うわあああん…」

「泣いてもダメよ！ちゃんと片付けなさい！」

開きっぱなしだった部屋のドアから、シュラを引きずるケイトが現れた。

「何だよぉこの部屋使ってなかったじゃんかぁ」

しゃくりあげるシュラを、玩具の散乱する部屋に押し込むと、ケイトはそのままドアを閉めた。そして『シュラ・マーチスの部屋』と書いてある札がかけられた部屋に入り、壁を探り出した。

「あつた」

俺は急いで後を追うと、壁に頭を突っ込んだケイトの姿があった。四つん這いになり、少し怪しい角度であったが、俺はソロソロと彼女に近づいた。壁には…ちょうど子供が一人入れる程の小さな穴が開いていた。

「いつの間にこんな穴を…許せない！シュラ！今日中…いいえ、一時間以内で全て片付けないとご飯抜きだからね！」

「うえええええん」

それはまるで、親子の会話だった。あまりの微笑ましさに、埃っぽ

さ等忘れて笑った――…。

窓から見える月は、日本で見た月と何も変わらなかった。

俺は緊急に用意された固いベッドに横たわり、静かな夜に耳をすましていた。

何も聞こえない。ケイトもシュラも、そしてクリスマスも。みんな寝てしまったようだ。

「……」

昨日の今頃は…何をしてたっけ。そう考えて、思考を手繰り寄せても、何も思い出せなかった。

いつもそうだった。肝心なことが思い出せない…

大きく息を吸い込み、吐く。森の中だからか、見える夜空には星がたくさん散りばめられている。降ってきそうな星空とは、この事なんだと思った。

何を、怯えているのだろう。手が小刻みに揺れていた。怖いのか、それはそうだと思った。

今日の出来事は、決して良いものじゃない。スカウトなんて言うだけ、あれは半ば拉致に近かった。

「……」

クリスが言っていた。

『もうホームシックにかかったのか』

俺が日本に居るときの怖いもの。それは『人の感情』だった。

友達の、親の、自分に関わる全ての人の感情が、怖くて、怖くて。

近づかなくて良い。必要最低限の関係さえあれば、なんとかかなると思ってたし、事実なんかになっていた。

だけど、今は――。

隣の部屋の住人の寝息が、耳に残る他愛もない言い争いが。

自分を知っている人の存在が、こんなにも愛しいものだという事を……俺は、知った。

第五話：試練

「…きろ、起きろってば！」

「う…ん？」

やけに揺さぶられる体と、突然降ってきた叫び声に薄っすらと目を開く。すると、目の前で俺に馬乗りになって跳ね回るシュラの姿があった。

「いつまで寝てんだよ、この三年寝太郎が！」

バシツと頭を叩かれ、俺は体を起こした。そして寒さに体を震わせた。今は冬だからな、当たり前か。するとシュラは俺が起きたのを確認し、部屋から出て行った。

「なんつー元気だ…」

改めて、子供のテンションの高さに納得しながら、シュラが開けっ放しにしたドアに向かう。

「おはよー」

そう言われて、何度か瞬きをした。挨拶の主は見えない。深呼吸をすると、トーストの香ばしい匂いと擦りたての珈琲の匂いがした。

ソファではクリスが新聞を広げて寛いでいた。キッチンの壁からシュラが走って、手には二人分の朝食が抱えられていた。

「どけどけーウスノロ！」

「んだと…っ」

わざとぶつかるように蛇行するシユラをよけつつ、ジュージューと何かを焼く音がするキッチンを覗く。するとそこにはフライパンを水につけて手を洗うケイトの姿があった。

「あれ。やっと起きたんだ。朝ごはんさっさと食べちゃってよ、後片付けがあるんだから」

「あ…うん。分かった」

そう言つて、ケイトに誘導されるままにテーブルに座る。テーブルはガラス張りで、四つの食器とエスプレッソ以外は何も置かれていない。よく言えば清潔感が漂う、悪く言えば殺風景だった。

「いただきます…」

「ハイ、どうぞ」

新聞を見ていたクリスの目が、一瞬俺を捕らえた。

「…何」

「お前宛に、通知が来てる」

指指したのは、テーブルに一枚だけ置いてある封筒。俺は箸でスクランブルエッグをつつきながら、薄茶の封筒に手を伸ばした。

「……」

糊付けされたそれを剥ぐと、中からは一枚の紙が出てきた。

『^{ハヤシ}林 ^{ヤマト}大和殿。貴殿は今日よりHUNTERSの一員としてBクラスに配置されます。詳細は相部屋の団員にて。それでは… 本部』

「…なんて書いてある？」

クリスが読んでいた新聞をたたみ、紙が擦れる音がした。横を盗み見ると、ケイトは両手でカップを包み、その暖かさに夢中だった。

「いや…何かBクラスとかなんとか」

モゴモゴとウインナーを噛み砕きながら呟く。すると手にしていた紙が消えた。慌てて探ると、背後から忍び寄っていたシユラに奪われていた。

「あつ！おいコラ——」

「……ほんとだ、本当にBクラスって書いてあるよ。何で!？」

フガフガといいながら叫ぶシユラは相当混乱しているのだろう、口に銜えたトーストを床に落としてしまった。これでもかというほど塗りたくっていたジャムが、フローリングの床に染みた。

「ああ！もう、行儀が悪すぎだよシユラ！」

大袈裟にガタリと立ち上がったケイトは、キッチンへ飛んでいった。その一連の騒動を怪訝そうに見ていたクリスは、手元のコーヒーを

一口飲み、また何事もなかったかのように続けた。

「Bクラスか。全く、隊長も何を考えているんだ……」

スプーンでコンスープをかき混ぜながら、働きの悪い頭を奮い立たせる。

「…… Bクラスって、何か問題でもあるのか？」

「大有りだよ！」

横からシュラがへばりついてきたので、思わずスープをこぼしそうになった。

「何で何にも知らない、昨日HUNTERSに入っただけのヤツが、僕より上のクラスに配属されるんだ！」

「…は？」

床を熱心に拭いていたケイトが、こちらを見てため息をついた。

「まず、HUNTERSにはS〜Dのクラスがあるのは、昨日言っ

たよね？」

「…ん、まあ」

部屋のリビングの壁に吊るされたホワイトボードに、ケイトは素早く HUNTERS と綴った。やはり外国人、なんだか味のある英語だった。

「一番簡単に説明するよ？…S が一番上で、D が一番下」

滑らかにボードの上にピラミッドを書くペンを見ながら、あまりに簡潔すぎて俺は心の中で毒氣づいた。

…馬鹿にしてんのか？目を移すと、シユラが舌を突き出してあっかんべーをしていた。

「そこ、余所見しない！」

急に叫んだケイトに驚き、いそいそとボードに体を向ける。何だよ、乗り気じゃないか。

「それで、S クラスは今一人しかいないの。分かる？隊長よ、隊長。昨日会った黒髪の人」

「分かる。あの人は何かと衝撃的だったからな」

初対面るとき、獣だったし。

「そう、それで——私とクリスは A クラスなんだ。B クラスは…大

和が配置されたところ。それからCがあつて…シュラ、いつまで膨れているの？」

そう言つて、ケイトは頬を膨らませて不機嫌そうにしているシュラを見た。

「僕は、絶対納得いかないよ。後で隊長に直接言つから」

「やめなさい。全く子供なんだから……」

子供なんだから子供らしくていいと思つたが、気がつけばケイトも子供なのだ。それに、俺も。

「続き。Dは能力を持たない一般人のことを指す」

「能力？」

腕を組んで、椅子にもたれると、背中に押し付けられた木がミシミシ言つた。

「能力を説明するのは、いろいろ面倒くさいから――」

一息ついて、ケイトはペンを置いた。カタンという無機質な音が飛んで、それが合図かのようにクリスが黒い制服を持ってきた。手渡されて、その感触を確かめる。堅い、チョッキのようなものが服の下に入っていた。

「訓練所に行こう？」

「うわ……」

訓練所は、全面がガラス張りだった。本部の西側に位置するこの場所は、建物から一箇所だけ突き出っていて、見える景色は爽快だった。高い場所から地平線まで埋め尽くされた森を眺める。

ガラスに張り付いて外の景色に感心していると、後ろで気配がした。

「!？」

「おっ！俺の気配に気づいたのか？さすがはBクラスだ」

振り返った先には、ロイス隊長がいた。さらによく見れば襟元にシルクのリボンがついている。金の刺繍が施されたそれは、滑らかに光っていた。

「…ロイス、隊長」

「ん？」

「リボン、その。何なんですか？」

「ああ、これ。おいケイト、説明してなかったのか？」

そう話を振られて、ケイトは罰の悪そうな顔をして肩をすくめた。

「これはな、階級を現すモノだ。ハンターズ団員にしか分らないけどな。金の刺繍が、Sクラスで、赤がAクラス、それで青がBクラスで、それより下は全て黒だ」

言われてみれば、確かに。ケイトは襟元ではなく腰の位置に赤の刺繍が施されたりボンが揺れていたし、クリスに至ってはふとももの位置に赤の刺繍リボンがあっし、シユラは裾に小さな黒い刺繍リボンがたなびいていた。

「——あ」

ふと腕に目をやると、腕に青の刺繍のリボンが垂れていた。言われるまで気がつかないなんて、どれだけ周囲が見えてないか分かるな…。

「…さて、ヤマト。少し、お前に過剰評価をしてないか確かめたいのだが。昨日の一件だけではさすがに判断がしにくいからな……」

そういつて、ロイス隊長は指をコキリと鳴らした。その仕草が、あまりに子慣れていたので、背筋にゾクリと電流が走った。

次の瞬間、隊長はまた獣に変身した。巨大な黒い狼を見て、尻ごまない人など居るのだろうか。手のひらにじっとりと汗が滲むのが分かった。

『……ふふ、お手並み拝見だ』

グルル、と唸り、鼻先に皺がたまるのが見えた時——獣は消え、俺は跳ね飛ばされた。後頭部が堅い障害に激しく打ち付けられ、視界が何十にも分身したかと思えば、すぐさま1m先に獣の血走った黄色の目が現れた。

「ふ、ぐ……！」

咄嗟に顔の前で腕を交差させ横に飛び退くと、俺の暖かさが残る壁に獣牙が食い込み、そしてバチンという電撃音と共に閃光が走り辺りはまた静かになった。普通の壁ならば、あの一撃で崩れ落ちるはずなのだが、何故だろう。ガラスの壁は何もなかったかのようにあつげらかと佇んでいた。

「はあ……はあ……なんで？」

一瞬の動きにも関わらず、肩や腰や全身が痛んでいた。無茶だ。昨日まで普通の高校生だった——柔道はしていたが、何も訓練などつんでいない俺にこんな試練を。

『……なかなか、上等だ』

つかずもたれずの距離を保ちながら、獣は嬉しそうに笑うと舌なめずりした。フサフサの黒い毛が、棘のように逆立ち、興奮しているのが分かった。

息をつく暇もなく、また姿を消した獣は、無防備だった俺の横っ腹に食いついた。

「うわぁ……！！！」

牙が、牙が食い込んで。痛みに胃が焼けそうに熱くなった。

「は、なせ……!!」

ギリギリと、牙ではないのかもしれない。何かそれよりもっと恐ろしい——体の中に何かが入り込んできて、俺の意識を洗脳するような、誰かに、飲み込まれる。頭がグルグルして、暗闇の中に落ちていくような、そんな感じだった。

……ん？ここはいつたい……暗い。何もない、真っ暗だ。

『今、AクラスのMAに会ったら、真っ先に死ぬのはお前だ』

これはクリスの声だ。死ぬって、このことを言ってたのか……？

死ぬって、痛いんだ。怖いんだ。嫌だ。死にたくない。

『MAのことは、身をもって知ることだ』

隊長の、声。……これがMA？この恐怖が、MAなのか？身をもって体験したよ。こんな怖さが続くなんで、なら俺は無理だ。こんなものなんか、戦えるわけないだろ……。

助けて。誰か。痛い。助けて——。

暗い深淵の底で、俺は泣いていた。

なんて怖いのだろう。こんな、こんな世界……しかし次の瞬間、突如真つ白な光が降り注いだ。どこから、雄雄しい、静かな声がした。

『——主。光栄なる我が主。我に命令を』

……あ？誰？

『貴方の中に眠るものです。私の全ては貴方にささげる。さあ、今こそ命を……』

命って、命令のことか？なら、そんなものは今ひとつだけ。

——この苦しみから、解放して。

痛むこめかみを抑えてるのか分からない、全てが分からない状況でそれだけを願った。すると、腹を圧迫していたおもりのようなモノが一瞬にして軽くなった。

「…あ、ふ」

肺までもが苦しくて、気がつく俺は息をしていなかったらしく、額には冷や汗がびっしりと浮きでていた。

息を整えながら、少しは楽になった四肢に安心して上半身を起こしながら辺りを見渡した。

「あ……！」

そこには、獣と格闘する黄金のライオンの姿があった。金色の粒子を帯びたその体は、記憶を手繰り寄せてみると昨日のライオンだった。

『何だ、くそ——ッ！！』

『主、次の命を——！』

絡み、もつれ合いながら黒と金色の獣達は咆哮した。

「……！！」

気が動転して、まだズクズクと痛むわき腹を押さえて立ち上がる。これは、試験なのか？なら、絶対に。

——ふつふつと、体の芯から熱いものがこみ上げてくるのが分かった。奥歯を噛み締めて、逆流するかのような熱い血液をこめかみに感じて、俺は唸った。

「そいつを、殺せ！」

しかし次の瞬間、ライオンは粒子を撒き散らしながら消えてしまった。荒い息を整えながら、黒い獣は隊長へと戻った。訓練所に敷き詰めてある砂まみれになってしまった隊長は、俺をひたすらに睨んでいた。素早く立ち上がり、まだ力が入らないでいる俺の胸倉を掴むと拳を一発頬に食らわせた。

「グッ！」

噛み締めていた奥歯のおかげで、一本も歯はかけることなく、俺はただ砂の上に倒れこんだ。抵抗する気力も体力もなく、空ろな瞳のまま隊長を見上げる。

「…は、お前、今なんていった？」

「——殺せ、と」

「どうして、そういうことがいえた？」

「……」

そんなのは決まっている。隊長は俺を本気で殺そうとした。殺されたくない、俺は生きたい。だから、俺を殺そうとするやつは殺そうと思った。ただそれだけのことに、理由などいるのか。

「いい心意気だ」

「——は？」

隊長は、ぎらついた目をなんとか冷まそうと、深呼吸をして微笑んだ。

「恐らくお前は、俺に殺されると思ったから殺せと言った、そうだろう？」

「……ハイ」

返ってくる答えと、違った。あまりにサバサバと問う隊長に、俺は動揺が隠し切れないで居た。絶対に、もう何発か殴られると思ったのに。

「それは、ハンターズの中では一番重要な素質となる。己の命に対する執着心。それがこの組織で生きていく中で最も重要なものだ」

手のひらにざらつく砂が当たって、不思議と腹部の痛みが引いている事に気がついた。牙が、食い込んでいたのなら、血だつて出ているはずなのに、何一つそんな様子はない。

「先程のヤツは、実際に起きた出来事ではない。俺の能力でお前に一つの試練を与えた。お前がそれに打ち勝てるかどうか、強靱な精神力とウルブを持つかどうか、それらを試したんだ」

「……」

いまいち話が飲み込めないが、先程の痛みが嘘だったと聞かされ、あまりのリアルさに身の毛がよだった。あんな能力が、この目の前の隊長には使えるのか。もし、一歩間違つて、その力を濫用するような事があつたなら。この世界などひとたまりもない――。

どうやら俺は、とても、絶大な力を持つ組織に入ってしまったらしい。

第六話：サリン

「大丈夫？」

「んなわけねえー…」

実際ヒリヒリとするのは肘やら手のひらやら砂に当たった部分だけだったけど。少しくらいは大袈裟に言ってもいいだろう。

壁にもたれかかって、治療の様子を見ていたクリスが事務的に言った。

「これで隊長はお前を正式にBクラスの隊員とみなした。恐らくすぐに任務の場所へ配置されるだろう」

金色の瞳に縁取られた青い瞳は興味なさ気に宙を見ている。

なんだかなあと、座っている丸いイスをクルクルと動かす。

「あつ！ちよつと——動かないでよ！」

動き回る肘に、ケイトが多少強引に湿布を貼ったからかなり染みた。

「……あのさ」

「何だ？」

真っ白な肌にブロンドの髪、切れ長の目。なまじ顔がいいものだから、クリスと向き合うとはくりよく満点だった。

「クリス——も、さつきみたいなこと隊長にされたのか？」

ずっと気になっていた。まさか、先程の拷問のような試練が俺だけにされたわけであるまい。

「……いいや。俺はされてない。ついでに言うと、ケイトもされてない」

「……何で」

持っていたピンセットを救急箱に納め、ケイトは俺を見つめた。紅い瞳は少しばかりの憂いを潜めている。

「…私達以外で、Bクラス以上の隊員は全て試されてるはずだよ。まあ方法はいろいろだけど、貴方みたいに精神系を試されることが多いみたい。任務先は戦場の様なものだから、あれくらいの苦痛に耐えられないとやっていけない」

「だから、何でお前らは試練を受けてないの」

指先を示そうとしたら、近くで退屈そうに欠伸をしていたシユラに噛まれた。

「痛ああ！」

「お前！聞いていい事と悪いことがあるって習わなかったのかよこの馬鹿たれ！」

「ああ?!」

「……いい、やめろシユラ」

あくまでも冷静なクリスは青い瞳を鈍く輝かせて呟いた。治療室には、今は俺達しかない。

「俺と、ケイトはな。親がいないんだ」

そうかよ、心の中で呟いて、後からそれはとても稀で、不幸なことなのかと思った。しかし不幸というにはありまりにも——目の前の二人は明らかに強さを放っていたし、不幸ではない気がした。

「だから物心ついたときにはロイス隊長が育ての親みたいなもので、毎日訓練や修行に明け暮れていた。だからいつの間にか尋常ではない精神力が身についていたらしく、普通に……そうだな、10歳の時にはBクラスとしてハンターズに入りMAと戦っていた。だからだな、わざわざそんな試験をする必要はなかったということだ」

目の前の赤い瞳と青い瞳は混じり、互いに何かを疎通したようにわずかにうなずいた。彼らは俺の踏み込めない、何か強い絆で結ばれていることに気づき、少し心が沈んだ。

そしてまた、家に帰りたい思いが強くなった。

「……ヤマト、もしかして」

ケイトが心配そうに言った。

「いいよ」

多分俺は今仏頂面をしている。何だろう、今更そんなに嫉妬をする年ではないと自分では思っていたのに。しかも、何に俺は嫉妬しているんだろう。

というか、今思いついた。

「俺、この組織から抜けれないの？」

意思是、昔から強かったように思う。

「ハンターズから脱退するには方法は二つ。一つは死ぬか・二つは戦闘不能もしくは戦闘意欲の低下だ」

「じゃあその戦闘意欲の低下ってやつで、俺は抜けれるんじゃないか？」

「残念ながらだな。お前はまだまだその基準には達していないように見える」

俺はいつだってこの方法で逃げてきた。自分に自信がない、やる気

がうせた。どうでもいい、そんな言葉で片付けられるほど、この世界は簡単だと思ってた。

でも、今この瞬間にそれは破られた。

「何で！」

「うるさいな。しかもまだ入団して一日目だぞ？そんな馬鹿な話があるか」

クリスは鬱陶しそうに言う。と治療室から出て行った。それを追う様にシユラも。逃げられないかもしれないと分かり呆然とする俺は、ふと視線を感じた。

「…何？」

見た先にはケイトがジッとこちらを見据えていた。本当に、瞳が赤いんだ。宝石よりも紅くて深く澄んでいる。

「あのね、ヤマト。貴方に一つだけ忠告があるの」

「??？」

真剣に、そう告げたケイトは瞬きをした。二人だけになった治療室がやけに静かで、少し心臓の鼓動が早くなる。

「もし、やる気——戦う気がないのなら、早めに組織を抜けた方が良い。前向きな姿勢じゃない人に勤まるほど、この仕事はヤワじゃないし楽でもない」

「……」

肘に隙間なく貼りついた湿布がやけに染みて、先程の戦いの激しさを思い起こさせた。

「貴方が嫌ならやめればいい。だけど。自分にしか能力がないということも——自分に救える命があるということも、理解しておいて」

「……」

理解つて。無理だよそんなの。俺に救える命なんて、あるわけない。事実先程、むちゃくちゃにやられたじゃないか。

『ハンターズとは”死に捉われたものの集団”』

それに、いつか誰かそう言ってたじゃないか。生と、死。その二つは、相対するものだし、そもそも言っている意味がよく分からない。

「…今はまだ、わからないと思う」

伏せ目がちに、ケイトは呟いた。

「だけど、時期に分かるから」

確固たる意思を持った目で見据えられて、少し動揺した。一体、何が分かるというのだろうか。出来れば関わりたくもないし、分かりたくもないのだが。

膝においていた両の拳を握り締め、自らを戒める。どちらにせよ、先程のような痛い体験をするのならば、かわりたくない。しかし

——彼女が言う、『自分だけにしか出来ないこと』という意味も、次第に気になり始めていた。

「とりあえず今日は、というか任務が入るまでは本部や寮を自由に行き来していいわ。キーのはずし方は見てるから分かるわよね？それに本部にはいろんな施設があるからそこも見てみるといい。じゃあ、ね」

どうやらここでの一日の生活の流れが分かった。午前中は訓練に明け暮れて、昼食。その後は夕方まで自由時間で、夜は勉強や各自寮に戻って談話や情報収集の時間らしい。それゆえに相部屋の人たちはそれぞれ仲が良く、まるで一種の家族、兄弟のように暮らしている。

俺とケイトとクリスとシユラは食堂で昼ごはんを食べ終え、それぞれ別に行動することになった。

「夕方にはちゃんと帰ってくるのよ？」

「はい」

そう言い聞かせる仕草はまるで母と子供のように、やっぱりケイトとシユラはとても仲が良いのが伺えた。というかケイトが一方的に

シユラに愛情を注いでいるようにも見える。

「ヤマト、貴方も図書館いくの？」

「ああ、少しこの世界というか、M Aというヤツに関してのいろいろ知識を蓄えたいからな」

最もそれは表面上の理由で、なんとなくケイトの傍にいたかっただけであるけど。

「ふゝん、いい心がけなんじゃない？あ、後そうそう。これを貴方にあげなくちゃね」

にこやかな笑みを浮かべて、ケイトはポケットから小さな機械を取り出した。シリコンの素材で出来た、小さなソレを、ケイトは耳に嵌めるように指示した。

「これは世界中からやってくる志願者の、言葉の壁を取り払うために開発された翻訳機みたいなものよ。これを耳に嵌めておけば、聞こえてくる会話を全て貴方の母国語に直してくれる。だから安心して他の人との会話も楽しんでね。…もちろんその言葉を翻訳するのに5秒くらいはかかるから、実際ちゃんと勉強するのが一番よ」

「すっごい、発明だな。何でそんなことできるの？」

「ハンターズは全世界に支援を受けてる組織よ。頼めばお金だっていくらでも出してくれるし、そう、自らの国の国民の命がかかっているのだから、どの国も必死なのよ」

「ふゝん……」

やはり自分とはんでもない組織に入ったと思う。だって全世界から支援されるとか、命がかかっているとか。

「あ、でも、何でケイトは日本語が話せるんだ？俺がこの翻訳機を持ってないときにもあんたとは話せたけど…」

ふとそんな疑問が浮かんだ。とても流暢だし、でも明らかに100%の外国人だ。

「ああ、言ったでしょ？私とクリスはロイス隊長に育てられて、英才教育じゃないけど、やっぱり色んなことを覚えさせられた。その中にはもちろん語学もあって、日本語以外にも3カ国は喋れる」

「凄いな…」

本当に心底から感嘆のため息を漏らすと、ケイトは顔をしかめて言った。

「全然、私なんて全然頭良くない、クリスなんか5カ国は喋れるんじゃない？ロイス隊長に至っては何ヶ国喋れるのかな…どんな任務地へ行っても現地の人と呑気におしゃべりしてるから、もうほとんど全世界の言葉を使いこなせるみたい」

「……」

次元が違いすぎた。

図書館はまた凄く広かった。見渡す限りは木製の机だらけで、天井はガラス張りだった。今日は快晴らしい、柔らかな光に反射して、

天井が透明にキラキラ光っている様子は綺麗だった。

日本にいるときは図書館などあまり行かなかったものだから、敷かれた紅いふかふかの絨毯に氣をとられている間に、ケイトはさつさと自らの興味のある分野の本棚へ行ってしまった。

「……さてと」

こげ茶の壁のように高い本棚に挟まれた空間は威圧感と共に落ちてく空間だった。俺はふと匂いがするのに氣がついた。木の匂い。いや、紙の匂いだ。古い本屋の中に漂う、あのレトロな匂いがしたふと近くの本を手にとって見る。相当使い込まれているのだろう、表紙が滲んでいた。題はややこしい、何語かすらも分からないものだったからあっさりと返却する。

すると、俺が立っている本棚のちょうど向こう側、つまり裏から何やら言い争う声が聞こえた。小声だが、刺々しい口調だ。

早速、耳に嵌めた翻訳機が活躍するときが来た。二人が話しているのは恐らく英語だ。スラスラと紡がれる言葉が、ちょっとして日本語となりかえってくる。

「…てよ、ここ、図書館なのよ?」

「いいじゃないか。図書館だから、というのもある」

「やめてったら!」

図書館の棚越しに聞こえてくる会話を盗み聞きするなんて自分でも性質が悪いと思ったが、やはり興味が沸いてしまうのは性質だろう。

”図書館だから”その言葉に含まれた真意が読み取れて、俺は興味のボルテージが下がっていくのを感じた。もしかして二人は恋人同士なのかもしれない。そうしたら、今聞いている会話はただの痴話げんかだ。

「やめて、ふざけないで。これ以上邪魔をしたら、私貴方との付き合いを見直すことになるわよ」

「ふ〜ん？そんなこと出来るのかな？君が僕から離れるなんて、とてもじゃないが出来るとは——思えないね」

耳をそばだてて、まるで俺は会社のOLみたいだなと苦笑していると、不意に背後からケイトの声がした。

「あ、居た居た〜……て、貴方一体何をしてるの？」

本当に、一瞬心臓停止したと思う。瞬時に振り返り、何事もなかった様に装う。

「い、いや…別に…」

俺の態度に、ケイトは少し眉をひそめて、そうして何かを察したように声の音量を下げて俺に引っ付いた。二人して棚に張り付くような格好になる。

「うわっ…」

「静かに！貴方何か盗み聞きしてたんでしょう？」

「盗み聞きなんて人聞きが悪いな——自然に…」

「自然に、何だって？」

驚いて、声の方を向くと、そこには美青年と美女が立っていた。

「何か柵越しに変な感じがしたんだ。君達だったのかい？」

ブロンドの顔立ちの良い男は嫌味なやつばかりだと思った。いや、俺が悪いのか。

「えっと……だから、あれは付加考慮というもので――」

「別に、貴方を責めてる訳じゃないのよ、事実私が助かったのは確かだし」

男の隣で呆れ顔で立っているのは黒髪だが恐らく外人の美女だった。ぱっちりとした二重の瞳に、小ぶりの唇と通った鼻。典型的なセクシー派だ。

「私の名前はサリン・ソンクラー。貴方は？」

美女はサリンという名前らしい。どうでもいいが、聞かれたので答えしておく。

「ハヤシ・ヤマトです」

「そう、ヤマト。”変態”から私を救ってくれてありがとう。じゃあね」

憤怒した様子で去っていくサリンを見ながら、男はこめかみを掻き

ながら苦笑いを浮かべた。

仕草や、早速ケイトに色目を使っている時点で、どうやらこいつは軽い男らしい。なつつこい笑顔とは正反対の、腹黒い性格をしてそうだ。

「変態とは——失礼な女だなあ……あ、僕の名前はダン。ダン・ブラウンっていいいます。以後お見知りを」

優雅に頭を下げる仕草をしてから、なんと色男ダンが卒のない手つきでケイトの手を取って口付けた。思わずケイトの表情が引きつる。俺の喉も引きつる。

「お美しい——貴女のような婦人にお目見えできたことで、サリン・ソクラーに振られたことは無しとしましょう。失礼ですが、お名前は？」

自らが最初に名乗るという関門をクリアしていたダンは、あっさりとケイトに認められたようだ。ダンの容姿も多少なりとも関係してそうだったが。

「ケイト。グレイス・ケイトといいます」

「グレイス——ケイト、承知しました。貴女とは一度、ゆつくりと話がしたいですね。……ではこれにて」

いつの時代の話し方だと突っ込みたかったが、それが目の前の男には似合うものだから齒痒い事この上ない。一言で言えば紳士。もう一言いえば、サリンの言う”変態”だ。

去っていく高身長の色男を見送りながら、しかしケイトはあまり興

味がなさそうに素早く俺の手を引いた。

「良かったねヤマト、知り合いが二人も出来て」

「良い訳ないだろ——！」

「冗談よ、全くもう」

何だももう。ケイトは以外に女王様気質なのかと頭に血が上るが、憎らしいほどに可愛い笑顔に黙るしか選択支は残されていなかった。

「とりあえず、こっち来て。少し見せたいものがあるの」

言われるままに着いていき、適当な場所に腰を降ろした。椅子はフカフカしていて、机はガンガンに聞いた暖房で温まっていた。

「……んと、あ、あった」

「え？」

そう言つてケイトが指差したのは小さな字が羅列するページだった。思わず目の照準を合わせるのに苦労する。

「これ見て。ちなみにこの本はハンターズが秘密裏に作った資料集なんだけど、やっぱりMAについて少しは知ってもらわないと、もしもの時に対処できないでしょう？」

「ああ、まあな」

なんとなく説得された気分になって示された場所を覗き込む。ケイトはそれを俺に押し付けると、また本棚の間へと消えていった。俺のために調べていてくれたのか、そう思うと、自然に頬が緩んだ。気を取り直して、ぶ厚い本をしつかりと掴み小さい文字を睨む。

『MA: 正式名所 *Missanthropy Animals* (通称 *MA*)』

ここまでで、長ったらしい英語に嫌気がさした。もともと勉強などしないし、嫌いだったせいもあるが、単語の意味がわからない。 *Animals* は、動物のことだろう。 *MA* って、なんかの動物なんだ。

ザツと目を走らせ、読みやすそうな部位を探す。

『MAの本意は人間が嫌いの生物という意味である。事実MAは人を見ると女・子供に関係なく襲いかかる性質を持つ。基本的な容姿は獣の姿をしているが、人を殺し強くなればなる程人の姿に近くなるので、強大なMA程人と見分けがつかなくなる。ちなみにハンターズ隊員はMAから出る気が分かる』

ここまで読んで、一息ついた。

MAは、人が嫌いな生物のこと。人を殺す。だからみんな、殺されるとか言ってたのか。話のつじつまが合い始め、納得しながらまた活字に目を落とす。

『現在MAの活動が認められている国は全てで5ヶ国。アメリカ・イギリス・フランス・シンガポール・日本である』

……日本？つて、俺の国じゃないか。M Aが活動しているってことは、すでに誰かが殺されているかもしれないって、ことか？

『幸いにもM Aはまだ活発には現れず、数が多く観測された地域からはすみやかに住民を避難させハンターズ団員を送り込むことで被害は最小限にとどめられている。しかしM Aの発見報告は年々増加傾向にあり、ハンターズの学者からはいつ数が爆発的に増えても可笑しくない時期にあるとの報告がある』

恐らく、ようするに、かなり危険な状態だということが分かった。学者つて、この組織はいつたいどこまで凄いのだろう。

というか、今気がついた。ハンターズが送り込まれるのは、M Aが観測された地域。俺はケイト達と、道場で出会った。つまり、あの道場の近くでM Aが見られたって事か？

そう思うと、居ても経ってもいられず、立ち上がってケイトを探した。

「あーれ、どうしたのそんなに急いで——つて」

「なあ、ちゃんと、M A片付いたんだろ！？」

大声を出したので、周りの隊員がいつせいに振り向いた。しかしそれだけでは余りあるほどの痛い視線に、少したじろぐとケイトは俺の腕を引っ張りながら図書館の隅っこへ向かった。

「大声を出さないで、それにここはハンターズなのよ？」M A”という言葉に、人一倍敏感な人たちの集まりなのだから、無闇にM A

とひとにきこえる声で言わないほうが良い」

「…っ、ごめん。でも、どうしても聞きたくて」

「大丈夫。あの周辺のMAは全て駆除した。貴方の心配するような事態には至っていないから安心して」

それを聞いて。固まっていた肩をほぐす。良かった。そうなんだ、本当に良かった。胸をなでおろした俺とは反対に、ケイトは不穏な表情をした。

「だけど――…」

「？」

「ん、いや、なんでもない」

「何だよ、気になる」

「いいから、静かに。早く席に戻って、コーヒーが冷めちゃうわよ」

何だろう。あの言い方、凄く引くかかる。時間がなくて、あまり整えてない髪をグシャリと掴んで、気を紛らわした。

第七話：任務開始（前書き）

一部グロテスクな表現がありますので、15歳未満はご覧にならないでください。

第七話：任務開始

「あれ」

分厚い本を溢れるほど持ってきたケイトが、不思議そうな顔をした。その方向を見ると、クリスが図書館の入り口を覗き込んでいた。

ようやく視界にケイトを見つけたらしいクリスは、ゆっくりと手招きした。

吸い寄せられるように近くに寄ったケイトに、クリスはひそひそと何かを耳打ちした。それを聞いたケイトは、怪訝そうな表情をして、俺も呼んだ。

「何、なんかあったの？」

「ああ、任務が入った。早く司令室へ」

任務。その言葉が持つ意味が妙に重苦しくて、心が暗くなった。

図書館の外には、シュラも居た。俺を見た途端太もを拳で殴ったので、激痛が走った。

どうして、この子供はいちいち突っかかってくるのだろ。構って欲しいのか？そんなことを思って、まるで小さい頃の俺じゃないかと、目下の膨れっ面の子供を見た。

「何、見てやがる！」

シュラがまるで小動物のように唸ったから思わず笑う。

「口が悪いな。相変わらず」

「うるせーよ。喋らずに、走れ」

「…上等だ——」

子供に指図されながら、俺達四人は一階下の本部の中心、司令室まで駆け下りて、さらに長い廊下を駆け抜ける。

何故こんなにも急ぐのかと思っただ、先程得た知識と照らし合わせると、任務「MAが出たで、その土地の人が殺されているかもしれない。ならば、時間との戦いだ。」

やっとのことで司令室にたどり着き、クリスがキーを開けた。中に滑り込むと、部屋の中は何もなければ真っ暗なのであるが、液晶モニターから出る微かな光で薄暗い状態だった。そんなことを観察していた——時間にしてほんの30秒くらいだろうか。ケイトは隊長から指令を聞きまた部屋の外へ出た。そうしてまた走り出す。あつという間の出来事なので慌ててまた追いかけた。

「どうするんだ！」

三人の走る速度の速さに四苦八苦しながら、ケイトに聞く。

「MAが出た。私達はとりあえず現地に行つて様子を探るだけみたい。だけど——」

妙に、その時のケイトは楽しそうだった。任務だというのに。

「MAに遭遇した場合は、その場で処理せよ」だって」

まだ全く任務の実感なんてわかなかった。アメリカ、そう聞いて真っ先に思い出されたのは——顔も忘れかけた、両親だった。

『偉大なる我がヴルブ、今姿を現さん』

ケイトがそう唱えると、いつかのように巨大な紅い竜が現れた。両翼を羽ばたかせて、四人でその背中に乗り込む。ヴルブ、俺のヴルブはあのライオンなのか？

「早く——急いでマイン」

主の急かしに答えるように、中に軽く舞い上がった竜は一気に青い空へとつき登りそのまま凄まじい速さでアメリカへ向かった。四方八方が海なものだから、落ちたら一溜まりもない。俺は空気抵抗に目を瞑りながら、必死でケイトの背中と竜の背中を掴んだ。黒い服の中に空気が入り込んで、これでもかと言うほどはためいた。

アメリカに住んでいる俺の両親は、母親はデザイナーで父親はなんかの会社の取締役らしい。俺が生まれてすぐ二人は海外赴任になり、俺は家の近くの、昔から親父と交流があつたらしい道場に預けられた。それゆえ先輩とは兄弟みたいに育てられ、十分楽しく、厳しく育てられたから、俺は両親を恨んでなど居ないし、毎月大量の養育費を送りつけてくれたことに、皮肉をこめて感謝の手紙を送つたりした。でも、かえって来なかった。仕事が忙しいのだろう。人は皆そういつて、有名になった両親を褒めたたえた。

『まあ、あの二人のお子さん？それならばさぞかし頭が良いのでしょうね！』

『…どうしてこんな問題が分からないの！』

『不良ね。本当困るわ、ああいう子供』

月日が経つにつれて、周りの評価は落ちていった。俺がそういう風にわざと育ったせいでもあるけど、親の名前など、絶対に出して欲しくなかったし、俺と親を比べたやつらは片っ端から殴つた。俺の切れたら止まらない性格は、こんな環境から生まれたのかもしれない。

——だから。恐らく、全く関係ないのだろうけど。アメリカに行つて、親に会ったら。絶対に、口など聞いてやらないと思う。16年間もほつたらかしたんだ。それぐらい、当たり前だろ？

空を駆け抜けた時間はおよそ20分。どれだけ、この竜は早いのだろう。恐らく俺が思っているよりもっと早い。飛んでいるときは、なにやら白いベールに包まれていてあの空気抵抗だから、まともだ

つたら一瞬で吹き飛ばされてるだろうな。

静かに降り立った場所は退廃の土地だった……。

「……随分派手にやらかしたものね」

ケイトは乾ききった土をさわり、人の気配が全くしない茶色の平地を見た。遠くに数件見える民家は全て屋根に穴が開いているし、近くの木々は何か凄まじい力で引き裂かれたように捻じ曲がっている。

「…本部、アメリカ・リノ州に到着。しかし人の気配はなし。周辺の民家は大破。近くを探索し生存者を探す」

クリスは何やら小型ラジオのような機械を取り出して、通信し始めた。恐らくそれが本部との連絡を取る術なのだろう。

「ヤマト。行くよ」

困惑していると、ケイトがこちらを振り返って、クリスとシユラはさっさと民家に向かい歩き始めていた。

「待てよ」

小走りで追いつき、少し鼓動が早くなるのを感じた。

「……気をつけて」

ケイトにそう言われて足元に目を落とすと、家の入り口には大量の釘やガラスが落ちていた。まだスニーカーだった俺は慌てた。

「……」

ひっそりとした薄暗い緊張感の中、急にケイトの手の平が光ったかと思えば、白い粒子が集まり短剣の形を象った。角度を変えるたびに銀色の刃が光り、細くしなやかな指が鞘の部分を堅く握り締めるのが分かった。

「……剣？」

ふとクリスを見ると俺はさらに驚いた。彼が持つのは太刀だった。太い、長い、長身のクリスの背の丈程もある剣だった。細身のクリスに、それが扱えるなど信じられなかったが、軽くそれを頭の上に持ち上げる動作を見て、その考えは覆された。

「何で、剣が？」

「あれが二人の武器だよ」

傍で全ての段が飛び出たダンスを探るシュラが静かに言った。

「みんな、あんな風に武器を出すのか？」

「そうだよ、MAには鉄の武器なんて効かないからね。自分のエネルギーで創り出した武器じゃないと、対応できない」

「……」

俺は、どうするんだよ。そんな武器、出し方すら分からないぞ。

「大丈夫だよ。ヤマトはまだ初心者だから、出来るだけ僕らが守る。この任務が終わったら、訓練所でブルブや武器を創り出す練習をすれば良い」

「無駄なお喋りをするな。いつMAが現れるか分からない状態に、呑気なものだなお前は」

せつかくのシユラとの会話を、クリスに遮られ、なんとも消化不良だったが黙ることにした。場の空気が、どんどん張り詰めていたからだ。

「……おかしい。死体が一つもない。MAが食べたのかな？」

「恐らくな。どこへ行ったか、分かるかケイト」

足元に散乱した雑誌を蹴りながら、クリスが言った。

「……気の方は、町に向かってる」

「町?! ……おいおい、悠長にこんなことしてる場合じゃなさそうだ」

「でも」

ここから見えるのはケイトの背中だけだった。しかし、彼女が張り詰めるような声を出したのは確かだった。刀をゆつくりと、動かす。

「町に行く前に、一匹倒す必要があるみたい」

ケイト足元近く、陥没した床から何かが這い出てきた。その正体が見えたとき思わずよろけた。

退廃した部屋の真ん中に、牛ほどの大きさの獣が居た。隊長にも似た、巨大な黒い狼は、何かで殴られたのだろうか、額は裂けていた。突き出た鼻先からは、赤いものが滴っている。それは、恐らく、人間の、血。

「…へえ。結構、いっぱい人を殺してるみたいだな。血の匂いがプンプンする」

ケイトは何故か嬉しそうに言うと、それが合図のようにシユラが俺の手を取り一気に家から飛び出た。茶色の土を蹴りながら、全速力で折れた木の下まで走る。

「ここで隠れてるんだ。もしかしたら外に出てくるかもしれない」

「…」

喋れない。返事も出来ない。恐怖のどん底に叩き落されたみたいだ。あんなのと戦えるなんて、あの二人の精神力はどうなってるのだろうと思った。目の前の子供だって、やはりまだ微かに不安そうな声

だけど、喋れるだけ、状況判断が出来るだけ凄じやないか。落ち込んだ俺を察してか、シユラは励ましの言葉を口にした。

「大丈夫だよ。僕だって最初は、今もだけど、本当に怖かった」

「……そうなのか？」

返事が返ってきたことに安心したのか、シユラは微笑んで俺の隣に入り込んだ。

「……うん。誰でも最初はそんなものらしいよ。ケイトだってクリスだって」

そこまで言って、民家の屋根から何かが飛び出た。動きが早くて、残像しか見えないけれど、黒い。獣だ。木の根っこから顔を出し、恐る恐る様子を見る。

遠めだから、細かい様子は分からないがケイトと獣がぶつかり合う度に紅い鮮血が空中に舞った。どちらの血なのだろう。もしも、ケイトだったら――？しかしその心配は杞憂に終わった。次の瞬間、凄まじい咆哮が聞こえ、そして飛び回り見えなくなった獣が止まり、その場に倒れこんだ。血が茶色の地面に染み込み、なんともいえない光景になった。退屈そうに獣を蹴っ飛ばすケイトを見て、隣の子供に問う。

「……あ、あのケイトが？」

「……うん。終わったみたいだから、行こう」

そう言い残し駆けていく子供を見ながら、ふと思った。なんとも思

わないのだろうか、あの光景を見て。そりゃシユラは何度もこういう場を見ているのかもしれない、だけど、それはそれで悲しいことなんじゃないかと思う。

「俺が出る幕もなかったな」

太刀を肩に置いて、クリスがため息をついた。

「簡単だった。さっきのは多分DクラスのMAね。任務になるのはBクラスのMAだから、全然違う獲物だったみたい」

「…なんだ。他にもいるのか？」

「そのほうが楽しいじゃない」

不毛な会話だと思ったが、気がついた。やはりケイトは任務になると口調が少し男らしくなるようだ。態度とかも、かなり。

「町に行くぞ。人が襲われていないことを祈るな」

「ああ」

黒い制服は、やはり一般人のそれと違うので、町ではかなり目立った。しかもケイトとクリスは無駄に顔が良かったため、道行く女や男が興味心身で覗き込んでいる。肩身が狭い思いをしながら、人通りの多い町を歩き回るも、そんな気配は全くしない。

「……どうなってる？」

クリスが眉をひそめながら言った。

「さあ、多分どっかに潜んでるんじゃない？……それが、もう違うところに移動したのかも」

少しだけ、不安そうにケイトは笑った。結局その日は日が暮れるまで町を歩いて回ったが、何の収穫も得られなかった。

宿を取って、結局俺達は一晩この町に滞在することにした。

「ふあゝ…疲れたー」

ドサツとベッドに倒れこみ、重い瞼を何度か瞬かせる。ハンターズの隊員はどこへ行ってもビップ待遇で、宿も一番良い部屋に止まらせてくれた。一瞬なんと良い身分だと思うが、それはその対価分の恐怖があるから。

「お風呂、行ってくる」

ケイトはいそいそと部屋から出て行ってしまった。シュラはベットの上を飛び跳ね、次に俺を見て構えた。

「なんだよ」

「いや」

「なんだってんだ！」

「だから何も——つぶ！」

いきなり顔面に当たった枕に、思わず顔をしかめる。シュラが、投げたようだ。子供の癖になんとという素早さ。クリスはソファに座り静かにコーヒーを飲んでいる。一番うるさそうなケイトは居ない。……これは、やるしかないだろう。

なんとって俺はまだ16歳だ。

「うりゃあ！」

近くにあった枕をひつつかみ、渾身の力でベロベロと舌を出す子供へほづる。見事に顔に当たったらしく、力なく枕がベットに着地するころには激怒したシュラの枕が俺めがけて飛んできた。

「ほっ！」

素早くよける。そして掴み、投げる。

そんな事を繰り返して、10分が経っただろうか。お互いに息が上がり、暫し枕を抱えたまま停止する。大暴れしたので、気にしているかとクリスを見ると、何事もなかったかのようにコーヒーを啜っている。

「……いい加減、諦めろよ」

シュラが忌々しそうに言ったから、こちらもニヤリと笑う。

「そっちこそ」

「く……ッ！」

容易く挑発に乗るところは、やはり子供だと、そこまでは計算済みだった。……そこまでは。

体力のなくなったシユラがぶん投げた枕は、俺の居るベットは全く違う方向へ飛んでいった。そこには。

「いた！」

お風呂から帰った、ケイトが居た。真正面から枕に当たったのだ、痛いだろう。ポトリ、と床に白の枕が落ちて、心なしか微笑んでいるケイトは眉間に皺を寄せながら言った（笑いながら皺を寄せるのは高等技術だ）

「誰？今投げたの——」

「ぼ、僕じゃない！ヤマトだよヤマト！」

「なっ何だとこの——」

ガキ。といいかけるが、ケイトが静かにベッドに乗ったので押し黙る。

10畳程の部屋の中に、かつてないほどの緊張が漂う。

「……私はね、どちらでも良いのよ」

「……」

「ただ……」

スウ、と息を吸いこむ音がして、

「あんた達自分が何歳だと思ってるのよ！！？馬鹿にも限度があるわ！最初といい、今日といい、本当に！ちよつとは大人になりなさい！」

耳がキーンと鳴った。それはシュラも同じだったようで、耳に指で栓をしている。

「…はあ、クリス。私にもコーヒ―頂戴」

本当に疲れたようにそう呟くと、あらかじめ知っていたかのようにクリスは無言でキッチンへと向かった。風呂上りのケイトからは、石鹸の香りがした。

第八話：冷血人間（前書き）

今回は少し少なめです、

第八話：冷血人間

俺は程よいまどろみの中を漂っていた。海の上に漂っているような……心地よい、ゆれ。暖かい日光を全身に浴び、大あくびをする。爽やかな風が吹き、優しく頬を撫でた。

ああ、気持ちいい。こんな状態がずっと続けばいいのに――。そう思っ、伸びをした時、何か耳鳴りのようなものがした。

「……？」

何か、何だ――凄まじい速さで青い空から飛んでくる何かを見極めようと、身を乗り出した瞬間、激しい痛みが顔面に走った。

「痛っ――！」

思わず目を閉じると、バサツという何かが落下した音と、カチャカチャと、鉄製の何かが擦れる音がする空間にいた。

「……あ」

起き上がると、そこは昨日止まった宿で、枕元になにやら紙の塊が落ちて居た。啞然としてそれを見ると、『wind later』と書いた青い巻きで閉じられた新聞だった。

「お、来た来た。遅いから何かあったのかと思った。ヤマト、それを持ってきてくれ」

こちらを向いたクリスは、いつものようにコーヒーを飲んでいた。

先程顔に当たったのは、この新聞だったのか。心地よい夢を邪魔されたことにひどく憤慨しながら、新聞をわし掴みにする。

「ほらよ！」

クリスに差し出すと、ブロンドの端正な顔立ちの男はひどく怪訝そうにした。

「……どうも」

それを見たケイトはまるで可哀想な子羊を見るような目つきでこちらを見た。

「何？朝から機嫌が悪いのね——寝起きは悪い方？」

「いいや！」

いまだ覚めやらぬ怒りを徐々に納めつつ、自分も空いた席に座る。目下の美味しそうなトーストにバターを塗りたくり、はたと気づいて脇においてあるお手拭に手を伸ばした。

「……どんな感じ？クリス」

コーンスープの入っている白いカップを唇に当てながら、ケイトはクリスを上目遣いで見た。彼女の茶色の髪の毛は柔らかくウェーブしていて、思わず触りたい衝動に駆られた。

「……何にも、特に変わったことはなかったようだ、良かった。俺達が昨日見つけられなかったMAは、まだ動いてないらしい——」

「そう、良かった！」

緊張感を漂わせていたケイトは、ニッコリと微笑み、カップをテーブルに置いた。

「……というかさ、クリス、その新聞何？さっき空から飛んできたように見えたんだけど」

質問すると、クリスは新聞をたたんでテーブルの上に置いた。そしてフォークをサラダに混じった赤いピーマンに突き刺し、それを口を運びながら——不機嫌そうに言った。

「……これはwind laterと言つて、全世界に散らばつて任務をしているハンターズ団員の生死や様子、さらにMAによつて死傷された人の数、つまり裏情報、国家機密の情報が満載の新聞だ。一般人には見られないように、風を纏つてやつてくる。目的の団員に届くまでは、ある特殊能力によつて粒子状態にされているから、途中で飛行機や建物に当たつたとしても通過する。便利な道具だろ？」

「……ああ、凄すぎる」

特殊能力。まさかそんなものが本当にこの世にあったとは……まだ火とか水とか、聞いた事のある現象ではないけれど、十分凄い代物だった。実用的。

「……今日もいい天気だね。MAを倒すには最高の青空」

ポツリと、そう漏らしたケイトに、思わず鳥肌が立った。この子は……隣に、肘がつくほど近くににいるこの女の子は、昨日獣をいとも簡

単に殺した。それを思い出し、口の中で丸まっていたハムを飲み込む。

別に獣は、俺達に有害だったわけだから、人殺しとかそういうモノではないのに。やはり一つの命を奪うことを、嬉しそうに話す少女に、冷たい雫が心に落ちたような、そんな気分になった。

「……どうしたのヤマト？気分でも悪くなった？」

「、いや。なんでもないよ」

思わずフォークと皿がぶつかり、無機質な音を立てた。シユラの円らな瞳（黙っていればだが）がこちらを盗みて、クリスの食を進める手が止まった。

「……びびったのか？」

「何が」

口角を上げる仕草に、苛立ちながらまたフォークを動かす。やはりクリスとは合わない。何か――人を侮辱するような、どこかいつも嘲笑しているような、そんな力才で笑うのだ。

ハンターズに入ってから、二日経ったけど、やはり周りの人たちは冷血人間な気がしてならなかった。

…もっともそれは。

俺が、M Aの事を知らなかったからであるけど。

第九話：衝動（前書き）

一部グロテスクな表現がありますので、15歳未満はご覧にならないでください。

第九話：衝動

朝食を食べ終え、素早く宿から出る。——と、何かの群集に出会った。

「うつわ！」

思わず、ケイトのほうを見たけれど、彼女は全く動じていないようだった。無論その他の二人も。降りしきるフラッシュがある人物に向けられていることに気がついた。黒い、スーツ姿の、枯葉のような細身の、初老の男。後姿しか見えないが、何故かその背中を見たとき、不思議な感覚に捉われた。

…どこか懐かしい。

…風車。夕日。とんぼ。

そんな言葉が浮かんできて、記憶を引き戻していく。随分昔のことなのだろう、記憶は摺れたカセットテープみたいに色あせて、ぼやけていたけれど、はつきりと残る男の人の声。目を瞑ると、そこには顔のない誰かの、しかしとても暖かい笑顔の、男の人が子供の俺をおんぶして河原を歩いていた。オレンジ色に染まった空に、黒い点点のようにカラスが数羽飛んでいる。

『…楽しかったなあ…ヤマト』

『うん！また、行こうね』

『…ああ、もちろんだ』

はは、と笑った男の顔は、やっぱりわからなかった。

フラッシュの音で目を開ける。記者に取り囲まれていた男が、ふとこちらを向いた。

「――!」

先程の、顔のなかった男の、表情が鮮やかによみがえる。あれは、そう、笑っていた。

笑うと目尻に皺が出来る、光沢のある黒髪だった、親父。

今、目の前で俺を凝視するのも、親父。

肩が引きつって、一步下がる。時が止まったような、辺りに居たはずの人物が消えて、代わりに親父がくつきりと浮き出る。

白髪交じりで、少し痩せていたけれど。確かに俺はその人が父親だと分かった。それは、雰囲気似ていたのもあるけれど、やはりその人がジッと俺を見ていたから。

あの黒目がちの目。――懐かしい。10年以上も前の力才。よく覚えてた。

「…どうしたのヤマト？」

ふと、そんな声で我に返る。声の方向を向くと、そこには不思議そうに俺を覗き込むケイトのがいた。

「いや――その」

「何故突然辞職されたのですか!!」

突然大声を出した記者が、親父にマイクを突きつけた。

…辞職？会社、辞めたんだ。別に特別な感情はいだかなかった。俺を捨てた親のことだ。

そう再確認して、その場に背を向けた。

「ヤマト!!」

苦し紛れに聞こえたその声に、俺は…耳を傾けなかった。それどころか、腹の底から沸きあがる怒りで気が動転し始めていた。

「知り合い？」

「いいや、全然、知らない人」

「そう、じゃあ、急ごう」

走り出して、巨大なビルに狭まれた灰色の空を仰いだ。

「MA…の、気配がする」

「…」

ふと、静かにケイトが言った。そこは薄暗い路地裏だった。人通りは少ない。ここなら、最適な場所だろう。そんなことを考えながら、鼻を掠めた、生臭さに思わず鼻を摘む。そして、薄暗い中でようやく視界に移った光景に目を疑った。

「…う、そだろ——」

それは初めて見た、人が人に食われているというシーンだった。いや、正確には人ではないのだろう。頭から、角のようなものが生えた、半獣は、真っ赤になった口の周りをペロリと舐め、俺達のことなど視界に居ないとばかりにまた人の首下に噛み付いた。

血が、流れ出している。未だかつて体験したことのない恐怖が突き上がるように背筋を貫いた。クリスは瞬時に太刀を創造し、シユラ

も短剣を両手に創造していた。

「…Bクラス。半獣。こいつが私達の獲物だ」

そして剣を握り直しながら微笑むのはケイトだった。

「ヤマト…！」

ハッとして振り返ると、そこには親父が居た。顔を見た瞬間に嫌悪が腹を駆けずり回る様に出てきたので、親父に駆け寄る。よくも、よくもノコノコと。——絶対殴ってやる、そう思っただけの胸倉を掴んだ瞬間、閃光が走るように周りの景色が真っ白になった。

『空間移動完了。思う存分戦え』

そう聞こえたのは、クリスが持っているラジオのようなものからだった。

空間移動…？どういうことだ。親父が同じ空間にいることによつやく気づいたクリスは、血相を変えてラジオに話しかけた。

「一般人が迷い込んだ！至急もとの空間へ！」

『——無理だ。元の位置には一般人が多すぎる。今戻ればまた新たな一般人が空間に入り込む。その一般人はあとで記憶を消せば良い。そのまま戦え』

「しかし…！」

『一般人が一人死のうが死ぬまいが、世界は何も変わらない』

冷たく言い放ったのはロイス隊長の声だった。

…一般人が死ぬ？

一般人って、親父のことだよな。

…死ぬ？

脳が事態を認識する前に、激しい爆発音がした。

爆風が体に叩きつけ、思わずかがむ。灰色の煙に辺りは包まれ、視界は凄まじく劣化した。胸倉を掴んでいたおかげで俺と親父は同時に倒れこみ、そして、俺は立ち上がると共に掴んでいる男も立ち上がらせた。

「なんで……!! どういうつもりだよ!! 今更俺の目の前にあらわれやがって……殺されてえのか!？」

俺の中で、一番憎い奴が目の前にいる。腕を強く掴むと、案外細いのに驚いた。手の平に感じる、脆い骨の感触。親父は、少し疲れた表情をして微笑んだ。

「私はお前に……謝らなければいけないことがある」

「何を——……今更!!」

燃え盛る炎を鎮火するような口調で言われたので、思わず下唇を噛み締める。沸々と、今までの悲しみがわきあがってくる。16年の、負の記憶ばかりが親父に関連していて、そのまま、ぶつける。小さな刃が幾つも連鎖して胸に突き刺さるようだった。

「そんなの、今さらだろ！！俺はもうあんたの力なしで暮らせる！今更、親のふりしやがって……絶対！絶対俺はゆるさねえからな！！」

自分より軽い親父の体を激しく揺すりながら、大声で喚く。子供だ。

「……すまない、ああ——！ヤマト、すまない」

親父はひたすら謝罪の言葉を並べた。本当ならここで俺の方が育ててくれてありがとうなどという言葉を口にすべきなのだろう。しかし、そんな聖人に到底なれるはずもなく、ただ今まで俺を縛り続けていた孤独という巨大な苦しみが一気に流れ出た。突発的に、しかし確実に。

「ふざけんな！！絶対に俺は——……………」

一発殴ろうと、拳に力を込めた瞬間だった。

親父の背後に、先程のMAの冷たい微笑みが見えた……。

第十話：悲しみの共鳴

「ぐッ！！」

角に貫かれた腹を押さえ、親父はその場に倒れこんだ。血が、先程まで体内を流れていた、真っ赤な鮮血が、真っ白な空間を汚す。

俺はただその光景を、傍観していた。指も、足も、口さえも。何一つ、動かないのだ。

苦しむ親父を見下ろしながら、MAは端整な顔立ちを愉快そうにゆがめた。

『この人間はあまり美味しくなさそうだ…』

ニヤリと口角を上げると、白い牙が見えた。

「くそっ！！」

ケイトの声がしたかと思えば、銀色の刀が空を切りMAは一瞬にして距離を保った。彼女の片腕はむき出しになっている。制服が破られたらしい。血も微かに垂れていた。

「——遅かったか！」

目の前の光景と、彼女の言葉を照らし合わせて、最悪の事態が脳裏に浮かんだけれども、頭を振る。そんなことは、ありえない。肩で息をしながら、ケイトは何かを気遣うように言った。

「……ヤマト、この男は、お前の父親なのか？」

「ああ」

抑揚のない平らな声しか出ない。どうしてだろう、何でこんなに目の奥が痛いんだ。何かが、堰を切るように溢れ始める。どうしてケイトはこんなに苦々しい表情をしているのだろう。何が助からないのだろう。

スニーカーに、赤いモノが流れ着いた。倒れた親父から流れた液体のようだ。

赤い、血。

——血を指で掬って、次の瞬間には爆発していた。

頭の中の存在に、話しかける。今まではこんなこと出来なかったけれども、今ははっきりとその存在を感じるのだ。俺の感情に連動しているのは間違いない。

『主』

「早く出て来い…！あいつを殺す…！！」

粒子を撒き散らしながら現れたライオンを睨み、手のひらに何かを感じた。視線を落とすと、そこには大剣があった。手と一体化しているような感覚の鞘を握り、銀色に光る刀身に自らの目を移す。血走り、深い闇をたたえている。

どうしてだろう、先程まであんなに憎かった親父なのに。自らの手で息の根を止めてやるとさえ思っていたのに。MAがやってくれて、嬉しいはずなのに。

どうして。こんなに胸が痛むのだろう。

「ヤマト——冷静になれ！」

「やだ」

「冷静にならないければ、BクラスのMAは倒せない！」

「ごちゃごちゃうるせえ…！！」

ブンと、剣を振るうと、横に居たケイトが怒声を上げた。

「馬鹿が！」

ズドンと、重い拳を腹に食らった。思わず足が止まり、腹を押さえる。その場にかがみこみ、歯を食いしばる。影が落ちた白い地面を睨み、苦し紛れに言葉を紡ぐ。

「…っ、どうして、殺さないと、あいつは俺の親を…！」

ふと、その地面に何かが染みた。

小さな、染み。

それはポタポタと落ちて、さらに黒い染みになった。

ハッと気づき、見上げる。

——ケイトは、泣いていた。

雫が頬を伝い、無表情なのに、泣いていた。

眉を苦しそうに寄せ、肩は小刻みに震えている。

「…馬鹿だな、ヤマト」

「……」

「今のお前は…まるで、昔の私じゃないか」

「――」

どういうことだ、と尋ねる前に。ケイトは手の甲で涙を拭くと、俺に手を差しだした。

「冷静になれ」

手を掴み、立ち上がる。真っ赤に燃え盛っていた激情が、透き通るような青い炎へ変わっていく。

「冷静にならないと、自分を見失う」

「……ケイト」

少し腫れた目で、そう呟いた彼女の背後に、またあの目が角が見えた。

「あぶな……！」

しかし角はケイトを貫かなかった。彼女は俺を突き飛ばし剣でその角をなぎ払った。

「ヤマト、戦いたいなら戦えば良い！お前はハンターズだ！」

「……！！ああ」

答えると、ケイトはM Aに剣を振るった。M Aは素早くソレを避け、高く飛び上がって距離を保った。

「私はお前と戦う！」

そういつた瞬間、彼女の体を光が包み、同時に俺の体も粒子が覆った。手の平に剣を握っていた剣が少し変わったのに気がついた。それは先程までの、普通の刀ではなく。

柄と刃を繋ぐ部分にライオンの紋章が浮かんでいた。それは勇ましく口を開け牙をむき出し唸っていた。

「……！！」

レオンと、英語で書かれている。あのライオンの、名前か——？

遠くでMAとケイトが同時並行に走り抜けるのを見て、柄を堅く握る。何かが俺を守っている。そんな気がしてならなかった。

「やっと見つけた……！！」

背後で、シュラの声がしたが、立ち止まらなかった。

——もう怖いとか、そんなものは吹き飛んだ。

今はただ、復讐を誓った。

『ゾロゾロと……食い物が増えたな！』

牙をむき出して笑い、MAはケイトの棘のような斬撃を受け止めた。ギチギチと、エネルギーとエネルギーがぶつかり合う音が聞こえる。昨日ケイトがいとも簡単に殺した獣のことを思い出し、あの攻撃を受け止めるのだから相当強いMAなんだと感覚で分かった。

「く——っ！」

歯を食いしばり、ケイトは押され気味だった。踏ん張る足と、白い床がこすれ、摩擦が発生する。ケイトは女だ、力勝負では明らかに分が悪い。加勢とばかりに俺はMAの懷に飛んだ。刀を引き、槍のように突き出す。すると貫いたハズの心臓はなく、瞬きをする日まもなくMAの尖った角が一瞬見えた。感覚の問題だ、そう思い、死ぬ気で刀を掲げると、寸分の差でなんとか角を凌いだ。両手で支えるが、凄まじい力に腕が軋んだ。本気で、折れる。奥歯を噛み締めすぎ、歯が欠けると思うとMAは距離を取るように後方へ移動した。

ケイトが横から剣を入れたようだ。剣で切れたのか血が滴る手の平を見て、汗が吹き出るを感じた。ここまで緊張し、死を感じたのは今が初めてだった。肝が冷えるところではない。すでに冷え切っているが、しかし不思議と怖くないのだ。どうしてだろう、少し遠い位置で笑う半獣が、愛しいほど憎いのだ。MAは自らの爪を尖らせると、ケイトを舐め回すように見た。

『…あまり居ないほど美しい人間だな…食べたら、どんな味がするのだろう?』

そしてグッと、MAが踏み込んだ瞬間、ケイトの刀は弾かれた。鈍い音と共に、ケイトは片手でバック転をしながら一気に距離を広げるが、MAの方が一秒も二秒も早く、その爪がケイトを捉えた。と、見るよりも早く、俺の足は駆けていた。

『!?!』

気がつくとMAの懷に居た俺は、見事に剣でヤツの胸部を貫いた。

青い液体が、銀の刀身を伝い滴り落ちる。時間が止まったように、暫し俺とMAはにらみ合ったが、次の時にはMAは力泣くその場に倒れこんだ。

青い液体が流れ出し、見る見る間に足元は青い水溜りと化した。

戦いが終わったことを認識し、朦朧とし始めた意識に、しっかりと湯を入れ、急いで親父のそばへ駆け寄る。ケイトは自らも負傷した腕を押さえながら、そっと親父の首に指をやり、すぐにこちらを見た。

「まだ、脈がある!」

「え…」

足音がして、後ろに振り向くとクリスが居た。黒い制服が、白の背景の中でやけに目立つ。

「MA処理完了。直ちに――」

じつとりと、青い瞳は俺と視線を交わし、諦めたようにラジオに呟いた。

「最寄の病院へ、空間移動を頼む」

第十一話：彼女の記憶

「……」

点滴がポツンと、一定の周期で落ちるのをみながら、俺は眠りこける親父の顔を見ていた。

ふと拳が軽く扉をノックする音がして、振り返るとケイトと看護師さんが立っていた。

「命に別状はないそうだ。でも、少し血が流れすぎたから、血液型が同じのお前から血液を貰いたいのだと」

「ああ。分かった」

もう一度だけ親父の白い顔を見て、献血室へむかう。

「それと」

ケイトは念を押すように言った。

「先程の、空間閉鎖状態での貴方の父親の記憶は消させてもらったから。入院の原因は交通事故ということにしてる。まだ、隊長はハントーズやMAの存在は誰にも知られたくないみたいだから。世界中で、混乱が起きるからな」

「……」

記憶、なくなっちゃったのか。寝ている親父を見て、少し微笑む。

俺からしたら、その方が後味がいいのかもしれない。だってあんなに、責めてしまったのだから。”人は亡くした後に大切なものに気づく”偉い人が言った言葉が身に染みて分かった。別に亡くした訳じゃないけど、亡くす寸前までは行ったからな。

——やっぱり、どんなに足掻いても、俺はこの男が大事だったってわけだ。

献血をしながら、近くで飾られた花を見るケイトを見て、思い出した。

『今のお前は…まるで昔の私じゃないか』

人形のように端正な横顔は、俺の視線に気がつきこちらを向いた。紅い瞳は少しばかりの疲労を覗かせている。

「何？」

「…さっきの、言葉の意味」

「……」

彼女が問いの意味に気がついた時には、注射針は抜き取られていた。

病室へ戻り、いまだ眠っている親父を尻目に、俺とケイトは妙な沈黙を保っていた。クリスは任務が終わったとはしゃぐシユラにつき合わされ町に行ってしまった。あの白い空間に居た時間は長かったらしい、窓の外からビルの合間に沈む夕陽が見えた。

「……私に、親がないのは話したよね」

「ああ」

「…その親が死んだ理由がMA」

「――え」

「ほら、ヤマトの親は…運良く殺されなかったけど、私の親は」

静かな空間に漂うような声に、頷く。丸いイスに座って向き合いながら、ケイトはそんなに暗い話ではないとばかりに顔を上げて言った。不意に入ってきた風が、ケイトの柔らかな髪を揺らした。

「ハンターズに入る前だから…うん。10年以上、前かな。幼稚園から帰ったら、親が死んでた」

思わず言葉を失って、目を反らす。多分、親父のことで疲れていたんだろう。真正面からでは耐えれそうになかった。

「何だろう、あの時は、何がなんだか分からなくて——家から飛び出した。それで、ちょうど今日みたいな薄暗い路地に立ってたら、ロイス隊長にあった」

少し開いた窓から流れ込む空気は、部屋の中のぬるい空気を浄化していった。

「私は血まみれの親のこととか、帰る場所がないこととか、全部、何故かあのヒトに話してしまった。……多分、独特の優しさに惹かれていたのかもしれない」

同感だと思い、頷く。俺があの人と出会ったときも、人懐こさを感じた。

「そしたら、隊長は私の手を握って言った」

『復讐。したくないか?』

復讐、その言葉に、背筋が震えるような冷たさを感じた。俺が先程抱いていた感情は、それそのものだった。

「私は何のことか分からなかったけれど、親の兄弟なんかは一切しないし、行く後もないかったから、あのヒトに着いていく事にした」

徐々に、俺は自分が彼女と境遇が似ていることに気がついていった。小さい頃から、親族の存在を知らない。血の繋がるものの暖かさを、知らない。

「ハンターズには、年齢制限がないのは知ってるよね？」

「…ああ」

シユラとか、何歳なんだろう。ふとそう思った。

「それで、私の親を殺したのはMAという生物だということ。そしてそいつらを殺すための能力が私にふんだんにあること。そして——同じ境遇の仲間が多くいる事を知って、私はハンターズの団員になった。それが多分、私が6歳。クリスが10歳ぐらい」

「……」

クリス、その言葉が出てきて、何故か胸がざわついた。そうしたら、10年間も、二人は——。

「……ハンターズに成り立ての私は、とにかく戦いときは親のことを思い出してしまって、冷静になれなくて、仲間に迷惑ばかりかけていた」

…ああ、それで。彼女の言葉と、状況のつじつまが合い、俺は納得した。

「だから、私は」

「——」

突然の声の震えに、思わず立ち上がる。まさか。泣くな、泣くな。

しかしその動揺は直ぐに亡き物となった。

ケイトは、そんなに泣かない女らしい。直ぐに真っ直ぐな視線で俺を見据えた。

「貴方に、そんな風になってほしくないの」

「……」

「周りが見えなくて、仲間を傷つける。冷静になれなくて、一人も救えない。そんなって……」

そこまで言つて、ケイトは言葉を遮断し何かを示した。振り返ると、親父がわずかに目を開いていた。

「親父……!!」

「……」

覗き込むと、少し空ろな黒い瞳は天井を眺めていた。

「…大丈夫ですか？」

ケイトが反対側のベッドから親父を覗き込んだ。親父は暫し黙り込んで、やっと自分の状況を理解したらしく口を開いた。

「ここは…どうして私は病院に？」

「……それは」

「交通事故です」

ケイトの言葉に、慌てて口を瞑る。…危ない、思わず本当のことを言うところだった。

「貴方は、大勢の記者に囲まれ移動中に、信号無視をしたトラックに轢かれそのまま意識を失いました。その場に居合わせた私達が、貴方をここまで運んだのです」

次々と、口から出任せを言うケイトに感心する。説明を聞いた親父はようやくしつかりとした顔になり、俺を見るや否や目を見開いて言った。

「ヤマト…！お前——どうして、ここに？」

「……えーと」

適切な答えは、この場合なんなんだろう。上半身を起こそうと踏ん張った親父は、腹が痛んだのであろう苦痛に顔をゆがめた。

「ちゃんと安静にしておいてください」

ケイトは微笑んで言った。だいたい分かってきた。彼女の微笑には種類がある。悲しいのと、事務的なのと、本当に嬉しいとき。ケイトは一瞬俺を攻めるような目つきでコチラを睨んだ後、またフワリと微笑んだ。

「今は、人と話すよりも体力回復のために寝るべきです、と看護士さんが言っていました」

「え……？」

「なので私達はそろそろ」

ケイトはその笑みを崩さないまま俺の腕に手を通しドアまで引つ張っていった。

「や、ヤマト」

「心配すんなって」

少しばかり手を振って、そのまま視界は無機質な白いドアに遮られた。

「…少し強引じゃないか？」

「あれくらいしないと貴方あの人から離れそうになかったじゃない」

「折角の、16年ぶりの親子の再会なんだから？ 至少くらい」

「あのね」

苛苛と、ケイトは振り返った。それにあわせ、視線を反らすようにフロントの看護婦さんに会釈する。美人。

「どつちみちあの質問には答えられない。あの場所に居るとボロが出るだけ。なら早く本部に帰って現状を報告する方が効果的」

「……そんなもんか？」

「そんなもんよ」

頭の後ろに手を組んで、病院から出た。外にはシュラとクリスが待っていた。シュラはかなりの荷物を両手に抱えて嬉しそうに笑っている。夕陽に映えるクリスのブロンドを見て、少しばかりのモヤモヤを感じた。10年の月日が、どれだけの絆を作るか、俺は重々知っている。

先程まで不機嫌気味だったケイトはクリスを見るや否や走り出した。駆け寄り、笑い、その荷物の中のおもちやのようなものを見てまた笑う。いつも仏頂面のクリスも、ケイトと一緒にの時だけは笑うことにも、俺は気づいていた。

「……」

少し立ち止まり、その様子を眺める。

……何だが、俺だけが蚊帳の外みたいで。

心の中が、ザワザワした。

第十二話：風邪引き

あれから俺達はケイトのヴルブである紅竜マインにのり本部へ戻った。飛行中ずっと俺の機嫌が悪かったのは幸い誰にも気づかれることはなく、任務完了の安堵と疲労感で夜に本部に戻った頃には皆ベツドへ直行し眠りについた。いや、ケイトだけはお風呂に入って寝た。

「……」

人工的な光が何一つ切られた真っ暗な部屋に、小窓から柔らかな月光が差し込む。薄暗い部屋で息を潜めていると、隣でシュラが微かに呻いたのが分かった。寝相が悪いのだろう、定期的に壁を蹴る音も聞こえてくる。

その様子が――微笑ましくて、張り詰めていた緊張をフツと解く。

「…馬鹿、だな」

頭の後ろで組んでいた手を解き、布団の中に体を埋める。両目を瞑るとそこには暗闇が待っていた。物音一つしない空間は雑念を払いのけていく。やがて残るのは、核心的な感情。

さびしいとか、かなしいとか、……苛立つとか。

一気に、今まで考える暇すらなかった事柄が浮かんできた。

何で俺はココに居る？学校に行かなくていいのか。道場の先輩とか、同級生とかどう思ってるんだろう。

しかし、それは考えるだけ無駄な気がした。先程、ハンターズの団員に出来ないことないんだと分かった。記憶も消せるし、周りの環境を自分達にとって最適な環境にすることだって易しい。

ならば、俺の周りの人だって、俺が居なくなっただけなんて忘れていただろう。そうしたほうが、この組織にとって都合がいいのだから。

『人が一人死のうが——世界は何も変わらない』

ラジオから聞こえた、ロイス隊長の冷たい言葉。確かにそうなんだ。ハンターズは全てをもみ消し、何もなかったかのような顔をしている。周りの人も、世界が微かに変わったことなど機がつかない顔をしている。

——なんて、理不尽な世界なんだろう。

俺は思わず、光が欲しくて目を開けた。ベッドから抜け出し、小窓に手の平をつける。紺碧の空に、ゆったりとした満月が浮かんでいる。地球が丸いのだと分からせるように、丸まった夜空には光の粒がたくさんちりばめられている。

——シユラの部屋みたいだ。足の踏み場もないくらい、散らばった星。日本では、こんな綺麗な夜空はなかった。

何度も、その事実を確認するように瞬きをして、気にせず凜と佇む満月に笑みがこぼれる。

あれも、自分で輝いているわけではないのだ。太陽という、光で輝く。

「……」

手を下ろして、深く息を吸い、吐く。

落ち着け。今、苛立ちを募らせたって、明日からまた同じ日々の繰り返しだ。

理不尽な世界も。冷たい組織も。——俺の知らない二人も。

全て、全て忘れて。

今は寝よう。

重い瞼を開いて、自分が起きたことに気づく。部屋全体に太陽の光が差し込み明るかった。思いつきり伸びをして、肩を鳴らす。誰も起こしてくれないということは、俺が早く起きたのか。

モソモソとクローゼットにかけていた黒い制服を来て、部屋から出る。

リビングには誰も居なかった。静かな、朝の光の粒子が舞い、リビングのテーブルの上に降り積もっていた。

「…みんな寝てるのか？」

時計に目をやると、8時30分。特にやることもないので、適当に洗面台へ向かう。

ガラスに映った自分の顔は壮絶に不細工だった。髪はめちゃくちゃに跳ねているし、瞼は眠そうに腫れている。

冷水を出して、思いつき顔にぶつける。一気に思考が飛び起き、白濁していた頭の中がすっきりとしていく。洗面もそこに歯磨きに入る。洗面台のコップは四つ。シユラが任務完了時にお土産と買って買って来た中には俺へのコップが含まれていた。絵柄はなにやら変な動物が描かれてる。歯磨き粉のチューブを絞ながら、思わずにやついた。

「…あの小生意気な子供^{ガキ}も、案外可愛いな」

歯磨きが終り、一旦リビングに戻ると、寝ぼけ眼のケイトと会った。大あくびの最中だったらしいケイトは、慌てて口元を手で覆った。その仕草に笑いを覚えながら、朝の挨拶を交わす。

「おはよう」

「おはよー」

心なしか、声のトーンが低いのは気のせいだろうか。

そのまますれ違い、台所のお湯を焚くボタンを押し浴室へ向かう。汗を流したい。冷たいタイルに囲まれたバスルームに入ると、冬独自の寒気が背筋を走った。

お湯の蛇口を精一杯捻り、湯気が立ち上るのを確認すると再びリビングへ戻る。するとケイトはテーブルに頬杖について今朝来た window letter に目を落としていた。

「……はあ……」

不景気なため息に、思わず新聞を覗き込む。

「なんかあった？」

「……昨日だけでも、MAの発見件数が100件。前は一日50くらいだったのに……日に日に増えてる」

「……それって」

机に突っ伏したケイトの白い項に目を奪われる。パジャマ姿の彼女はなかなか、いつもの勇敢さとか気丈さが押さえられていた。その分、襟足には可愛らしさが覗いた。

「……MAの爆発的な増加まで時間がないのかもね」

ケイトがいきなり体を起こしたものだから、思わず近かった顎を引く。

「……何してるの？」

「別に。っていうか、爆発的な増加って——そんなことになったら、どうなるんだよ？」

昨日の、一匹のMAだけでも死に近づいた体験を思い出し、頬が赤いケイトに目を戻す。

「世界が混乱して——ッ！」

その後ケイトは盛大にくしゃみをした。鼻を擦りながら、彼女は何事もなかったかのように続けた。

「…どうなるんだろうね。私にも分からない」

「そうか」

自らの腕を抱え、寒そうに震えたケイトを見て、俺は台所へ向かった。さすがに、寒いからな。コーヒーとか、温かいものを作ろう。

「コーヒーいるよな？」

「え、あ、うん！」

たかがコーヒーを作るという行為に、心底嬉しそうに笑ったケイトを見て、こちらまで嬉しくなる。

「クシュ！」

シュンシュンとやかんが鳴る音と共に、また彼女はくしゃみをした。次は鼻水つきだったらしく、控えめに啜る音が聞こえた。俺はブラジル産コーヒー豆のボトルを捻りながら尋ねた。

「おいおい、風邪か？」

「——ん、多分。でも大丈夫だと思う」

はあ、と熱っぽくつかれたため息に、少し心配になる。お湯を二つのマグカップに注ぎ、テーブルへと持って行く。ケイトの頬の赤み

は増していた。凄くだるいのだろうけど、決して背筋を曲げないところは彼女らしいのか。

「ここ、病院とかないのかよ？」

「あるよ、一応。でも行きたくないし——ありがとう」

待ってましたとばかりにケイトは湯気の立ち上るカップを両手で包み一口飲んだ。その仕草とか、言葉が子供っぽくて、任務とのギャップにむずむずした。

「そんな、今更小学生みたいなこと言うな」

「うるさい」

拗ねたような口調でこちらを睨むケイトに微笑み、はたと思い出して、お湯を止めに浴室へ向かった。返ってきて、思わずよろめいたケイトが、テーブルの上に突っ伏していたのだ。それもかなり苦しそうに。薄い背中に手を置くと、体温の高さに益々動揺した。

「な——おい」

「ん？」

顔の赤さに比例しないしつかりとした返事に、少し安心するも、居ても立ってもいられなくなった。

「病院どこ？」

「…病院っていうか、医務室。」

「……」

ロイス隊長と戦い怪我したときに行った医務室を思い出し、場所は確か二階だったと確認する。あそこには医者も居たし、結構施設は整っているからな。

「医務室行くぞ」

「いや」

「お前なあ!」

一向に動こうとしないケイトに、自然と声も大きくなる。こうなったら、無理やりにでも。

「とりあえず着替えろよ。汗とかかいてるし」

「……」

ケイトが綺麗好きなのを、我ながら上手く利用したと思う。おずおずと自室で制服に着替えたケイトを見て、医務室へいこうと何度も言っが、彼女の頑固さはそりやもう、ひどいものだった。

「医務室行かないと、クスリとか。どうせないんだろ?」

布団の中にもぐりこむ、一向に出てこない顔にやきもきする。早く、これから熱が上がるんだぞ。

「いいよ、寝てれば治る」

曇った声でそう答え、彼女は苦しそうに咳き込んだ。

「……」

どうすれば、医務室へ行ってくれるのだろう。そんなことを考えていたら、不意にベルが鳴った。誰か来たらしい。

「おい」

拳でドアをノックするのは、ロイス隊長だった。それを聞いた瞬間、ケイトは先程までの駄々っ子ぶりが嘘のように布団から飛び起きた。

「うわ！」

「私は居ないってことにして！」

ドタドタと俺の部屋まで走っていき、ケイトはそのまま中から鍵を閉めてしまった。何か不味いことでもあるのだろうか。

とりあえず玄関へ向かい、鍵を開ける。そこにはワインを二本掲げたロイス隊長が居た。ご機嫌そうに、顔は笑っている。

「どうしたんですか？」

「ん？いいや、任務完了の——お祝いだ」

「お祝い？」

「まあ何でもいいじゃねえか。入るぞ」

ロイス隊長のがつしりとした肩で押し込まれながら、俺は半ば無理やりに部屋の中へ連れて行かれた。

「あれ、お前以外誰も居ないのかよ？」

静かなリビングがつまらなそうとばかりに、隊長は唸った。

「えーと、クリスとシユラはまだ寝てます」

そう答えた俺に、ロイス隊長は顔を曇らせた。犯人の家を探る探偵みたいに、家の中を隈なく見回している。一瞬、気づかれない程度に自らの部屋を見て、静かにテーブルへ座る。

「…ケイトは？」

「どこかへ行きました」

「…ふん」

まあいいや、とロイス隊長は呟き、持っていたワインをテーブルの上へ置いた。

――。しまった。コーヒー。二つのマグカップを見つけた隊長は、確信的な証拠をみつけた探偵みたいに口角を最大限に上げて言った。

「まだ暖かいコーヒーが二つ」

「……俺が」

「二つも——？一人で？？俺だったら、ありえないな」

焦りが立ち込めて、俺は一秒だけ自分の部屋を見てしまった。隊長はそれを見逃さないとばかりに目を合わせた。今ほどロイス隊長の細い目力のある目を感じたことはなかった。

「自分の部屋が、気になるのか？」

「別に」

「…そうか」

フツと視線を落とした瞬間、目の前の頑強な体は一目散に俺の部屋へ向かった。

「あ！」

「…なんだよ？エロ本でも隠してんのか？」

ニヤニヤと、そう笑いながら、ロイス隊長はノブに手をかけた。引っかけり、さらに気まぎれなる雰囲気、俺は頭を抱えた。これじゃあまるで——本当に、物的証拠を押さえられる寸前の犯人じゃないか。

「鍵、どうやってかけた？内鍵のはずだが」

「……」

もうだめだ。がつくりと頂垂れ、成すがままになる。隊長は興味心身にドアノブに人差し指を押さえつけ何かを呟いた。恐らく何か、魔法をつかったのであろう。軽快な音と共にドアノブが回りゆっくりとドアが開いた。

「……」

覗き込むと、ベッドは不自然に盛り上がっていた。ケイトが寝ているのだから、当たり前か。隊長は布団を驚づかみにそのままひったくった。

「……なんだ、何もないじゃねえか」

「え？」

不機嫌そうに呟いたのを聞いて、慌てて布団の中を見ると、そこには枕しかなかった。安著して、それならば彼女はどこに隠れたのかと思考を巡らせる。ふと、クローゼットが少し空いているのに気がついた。

「でも、まだ甘い」

バツと、勢いよく隊長はクローゼットを開いた。その中には、案の定、顔を真っ赤にしたケイトが丸まっていた。

「ケイト…お前、風邪引いてんのか？」

一瞬で彼女の体調を見抜いた、黒髪の男を尊敬する。のらりくらりとしているようで、隊長はやはり隊長なのだ。

「あ…その」

ケイトは蚊の鳴くような細い声でもゴモゴと言った。

「いいから、出て来い、医務室行くぞ」

グイッと、隊長はケイトの細い手首を掴んで引っ張り出した。力なくそのまま分厚い胸板に埋まる少女を見て、少し胸焼けがした。どうして、俺のときはあんなに嫌がったのに――。

「ヤマト、着いて来い」

隊長は少し怖い顔でそう言った。直線的な眉が、さらに吊り上っている。

ああ、そうか、どうしても早く医務室へ連れて行かなかったのかと。そう言われるに違いない。そうすれば、俺はきちんと怒りを受け止めよう。

「…ハイ」

ずんずんとケイトの肩を抱えて歩いていく隊長の後ろを、着いていくしか出来ない自分が不甲斐なくて――もしかしたら自分はケイトに嫌われているのかもしれないと思い、少し泣きそうになった。

第十三話：忠告

「…39度3分って…グレイスさん。貴方どうしてこんなになるまで医務室にこないの？これじゃあ任務どころじゃないわ。それにひよっとしたら任務先で伝染病にかかっている可能性があるので、暫く検査室に入ってもらいます」

俺はそれを聞いて呆れた。目の前の、女医が言うとおりだ、よくここまで我慢できたな。

「ケイト、ちようどいい。最近負荷が掛かる任務の連続だったからな。英気を養え」

子供をあやす父親のように、柔らかく微笑んだロイス隊長は、頬を高揚させて目をうるますケイトのおでこに唇を寄せた。チュ、という音と共に、分厚い手の平でケイトの頭を撫でた。その行為がやけに外国臭くて、少し——いやかなり恥ずかしくなる。

「——すいません」

申し訳なそうにケイトは呟き、真っ白な布団を頭まで被った。

「いいんだよ、そんな事より」

ケイトの丸い頭を撫でていた手は、彼女を囲うようにめぐらされたカーテンを勢いよく引いた。そしてここから先は男同士の会話だとはかりに、隊長はその細い目をさらに細めた。

「大和、ちよつといいか」

医務室から出て、あまり人気のない廊下に佇む。隊長は無機質な壁にその大柄な体をもたれかけさせ、懷から煙草を取り出した。その仕草が、やけに大人の男っぽかったものだから――思わず畏^{かしこ}まった。

「……お前さ」

乾いた唇に煙草をはさみ、ライターで火をつける。隊長は一連の動作を終えた後、ゆっくりと煙を吐き出しながら、静かに言った。

「――AクラスのMAを倒したんだって？」

「……は？」

突然の問いに、思考が停止する。まさか、怒られると思っていたのに。どうして彼女をあんな状態にさせておいたのか、責任を取れ、と。

少しの沈黙の後、なんとか浮き出てきた単語を繋げ、紡ぐ。

「えっと……俺だけで倒したんじゃないです。ケイトと、二人で」

白い煙が立ち上り、思わずこちらがむせそうになる。ヘビースモーカーなのか、もう煙草は相当の短さだ。褒められるかと思い、上がりそうになる口角を必死で押さえる。しかし隊長は沈黙したままだった。

「……それだけ、ですか？」

おずおずと尋ねると、凜々しい横顔の隊長は目だけを動かしこちらを見た。無造作に跳ねた黒髪が、何だか無性にかっこよい。

「いいや」

銜えている煙草を、唇だけで上下させると、隊長はようやく真正面を向いて言った。

「お前さ、ケイトのこと好きだろ？」

……二度目の、思考停止。思わず耳を疑った。

ロイス隊長は唇で煙草の端を噛み、にっかりと笑った。

「分かるんだよ、お前の仕草とか表情とか。分かりやすいやつだな」

「……—!」

柄でもないのに、顔が火照ってきた。これは断じて——否定しなければ。……否定？なら、何でこんなに体が熱くなるんだ。好きじゃなかったら、何も思わないはずだ。

それに初恋でもないのに、何度も、何度も、日本にいるときは結構荒れた時期だっただけだからそれなりの経験は積んでるんだ。何を

今更。

一瞬にしてさまざまなことが脳裏を駆け巡ったが、ロイス隊長は上から畳み掛けるようにしてさらに続けた。

「お前がケイトを好きなのは明らかな事実だ。認めるよ」

……プチン、と頭のどこかで何かが切れた。

「——俺はっ！」

ダンツという壁を叩く鈍い音の後に、長い廊下全体に反響するほどの声で俺は叫んだ。

「彼女のことを好きなんて思っていないです！」

……もしかしたら、ケイトに聞こえたかもしれない。だけどそれが何になる？ 頭の中がゴチャゴチャする。

何なんだ、違う。隊長の言ってる『好き』と、俺が抱いてる感情はまるで違う。高校生同士の好きなんかじゃない、彼女の過去や生い立ち、もちろん容姿がいいのは大分含まれているかも知れないが、俺は彼女を『好き』ではない、全然違う。

「……好きなんて思ってない、か。ならどう思ってるんだ？」

「……っ」

上から視線はやめろ、そう言いたくて仕方なかったけど。必死で言葉を飲み干した。

『貴方にはそんな風になって欲しくないの』

ふと、ケイトのセリフが頭に蘇ってきた。多少なりとも意味は違うのだろうが、16歳にもなって自分で自分の感情をコントロールできないなんて有り得ないと思う。自分に嘲笑し、そうして、はたど気がついた。俺はケイトに何かしらの親近感を抱いている。それは彼女自身の形成の元である体験が、俺自身の体験に似ているからでもある。

「答えるよ?」

野太い声は耳の奥まで届いて、苛立ちを倍増させる。今頭の中で整理している出来ごとが消えてしまう。そんな事は、許さない。ジュッという音がして、煙草の先端のカスのようなものが滑らかな床に落下した。

「少し、黙ってもらえませんか?」

俯いているから、ロイス隊長の表情は見えない。沈黙。怒らせたのだろうか、まあいい。殴られたって、どんなに、食い殺されそうになったって、この感情は隊長には言えない。感情の正体は自分でもまだ良く分からないけど、誰にも明かすことは出来ない気がした。

「正直言って、お前の気持ちはどうなのかとかはどうでもいい」

発せられた声があまりに平坦だったので、思わず顔を上げる。隊長は無表情だった。この顔、どこかで見たことある。——そうだ、ケイトとかクリスとか、ハンターズの団員は皆時々この顔をする。全く表情がない、無関心な。

「ただ、これだけは言っておく。……ケイトには——あまり近づくな」

瞬間にして、黒い瞳に魂が宿る。抜け殻のような表情は塗りつぶされ、生気の戻った、警告を伝える顔になる。

「あいつは、いや、あいつらか。ケイトやクリス、つまりAクラスの奴らは近々——MAの増加に伴って危険な任務に着く。お前はBクラス。先日の戦いで、お前も使えることが分かったから、もしかしたら危険な任務に配置するかもしれない。しかし、だな」

一氣にまくし立てて、隊長は一呼吸置いた。火傷するくらい短くなつた一本目を床に落とし、靴の踵で踏み潰すと、二本目を取り出し、流暢に火をつける。濁った白い煙がもくもくと立ち上り、視界は霞んでいく。

「前に言つた事があるだろう。ハンターズとは、『死に掟われた集団』だと。それはつまり、死に一番近い集団だという意味だ」

「……」

それはなんとなく分かった。身に染みて感じたからな。現に親父も、自分も、殺されそうになった。ケイトが助けてくれなければ、確実に死んでいた。

「俺の中で、こう思うんだが——人のために行動するやつほど、ハンターズでは早く逝く」

かすむ視界の先に、隊長がはっきりと俺を睨むのが分かった。白い

煙を掻き分けるようにして歩み寄ると、胸倉をつかまれた。

「……俺はケイトを逝かせたくない」

黒い瞳は、よく見たら薄茶色だった。不安と、苛立ちと、悲しみの籠った瞳が直ぐ近くに見えた。

「だが、ケイトはお前と居たらお前を助けようと動く」

「——……」

「だから、お前はこれ以上ケイトに近づくな」

脅すように、胸倉が締まる。苦しくなっても、目線は外さない。そんな、そんな不純な理由で、俺とケイトは仲良くするなど、そんなことあつてたまるか。

「嫌ですと、言ったら？」

睨み返して、長身に掴まれているせいで浮くつま先に力を入れて踏ん張ると、その手を払う。まるで縄張り争うをする犬みたいに、俺と隊長はけん制しあった。薄暗い廊下に、少しずつ声が響き始める。人の姿は見えないけれども。

「——ケイトも」

唸るように、しかしやっとなすり出す様に、隊長は眉間に皺を寄せた。

ピクリと指が反応する。

「あいつも、お前と仲良くしたいみたいだから、とめることは出来ないのかも知れんな」

「……え……」

意外だった。一瞬、勝ったと思うような感情が渦巻いた。しかし次の瞬間、その感情は崩れ去った。

「あいつはお前に、少なからず好意を持っている」

まるで耳のシャッターが下りたみたいに、俺は興醒めした。そんな事は、百歩譲ってもない。ケイトは他の誰かに頼ることはあっても、俺に頼ることは一切ないのだ。それはつまり、信頼されていない、いや、男としても見られていない。

「そんな事ないですよ」

半笑い気味に敬語で返したが隊長からの直線的な視線にまた目を見合わせる。隊長から出る気配に、先ほどのテリトリーを争うような牽制はもう、ない。

「……お前はまだ何も分かつちやいない。だから分からないんだろうが、ケイトはどうでもいい男を救ったりしない」

そうなんだ、素直に感想を漏らすと、隊長は話すことは終わったとばかりにもたれていた壁から体を一步離れた。ふと気配を感じて、背後を振り返ると団員がそろそろとこちらに向かって歩いてきていた。

恐らく集中力が拡散した俺の注意を元に戻す為だったのだろう、少し大きめの声で隊長が言った。

「俺は別空間で起きた出来事は全て知っている。だからお前がケイトに助けられたことも、ケイトがお前に助けられたことも知っている。あのときから、あいつは、ケイトはお前のことを意識した、それだけだ。じゃあな」

そう捲くし立てるように言った後、気が済んだとばかりにニカリと笑い隊長は去っていった。ヒラヒラと振られる手を見送りながら、結局自分は何のために呼ばれたのかと首をかしげた。

第十四話：M A（前書き）

グロテスクな表現がありますので15歳未満はご覧にならないでください。

第十四話：M A

薄暗い廊下に一人残されて、俯く。頭の中で、ロイス隊長の音が幾度も反響して、その意味を噛み締める。

『俺はケイトを逝かせたくない——だからお前はケイトに近づくな』
なんて、なんてわがままで身勝手に、クリスといい、シユラといい、この組織には精神年齢が低いやつばかりだと思う。それなのに、任務は完璧にこなすんだもんな。

部屋に戻ると、クリスがテーブルでwind letterを読みふけていた。

「お、はよ」

小さい声で言ったものだから、青い瞳は怪訝そうにこちらを見た。

「……」

沈黙に耐えられなくて、先程のことを連絡する。

「ケイトが、風邪引いて——今、医務室に居るから」

「何だと!？」

ガタツと大きな音がして、クリスは疾風の様に駆けて行った。その

様子がまるで、隊長とそっくりで、ケイトは二人の男に溺愛されていることを今更ながら知る。シユラの姿がないので、起こしに『シユラ・マーチスの部屋』と札が掛かった木のドアを叩く。

「シユラ？シユラー」

ドアノブをまわして、太陽の差し込む部屋に入ると、丸まった布団を抱きかかえるシユラの姿があった。寝相が悪いのは一目瞭然だった。

「おい。もう10時だぞー」

小さな肩に手をかけ軽く揺さぶる。色素の薄いもつれた髪の毛がシートと擦れて、次に瞳が薄っすらと開き、差し込む太陽と重なり合いガラス玉の様に光った。

「んう……うつせーあ…ねさへろ…」

まるで呂律が回っていない子供に苦笑しつつ、繰り出されるパンチを避ける。何だか無性に寂しくて、目の前の生意気な子供が愛しかった。目を擦りながら大欠伸をする子供の頭を撫で回す。

「やめ、やめろって！ったく…あれ、ケイトは？」

あたふたと暴れる子供を腕の中に収めて、ふと動きを止める。グレイス・ケイト。その言葉はまるで生活必需品みたいに皆口にする。それが妙に——鬱陶しくて、捕まえた華奢な体を離して、ベッドから立ち上がる。

「ケイトは、風邪引いたから医務室にいる」

「ええ！？何だよ、それを早く言えよ役立たず！」

クリスと同じ反応で、先程までぼうつとしていたはずのシユラは飛び起きて落書きだらけのタンスを開いた。そして黒い制服を羽織ると寝癖つきのまま部屋から飛び出していった。

「……」

再び静かになった部屋に佇んで、どうしたものかと思いを馳せる。役立たずとまで言われて、腹が煮え繰り返りそうならいだったが、そんな事しても無駄なエネルギーを消費しそうだったのでやめておく。

腕を組み、指先をほとんど動かす。すると――急にけたたましいサイレンが鳴り響いた。びくついて、廊下に飛び出すと、同じように驚いた人々が部屋から飛び出していた。何のためについているのか分からなかった、廊下の壁に付いたランプが一斉に真っ赤に光り始めた。騒然とした気配を断ち切るように、誰かが大声で叫んだ。

「本部にM Aが発生した！！」

それを聞いた黒い制服を纏った団員達が凄まじい速さで駆けて行く。

「……M A？」

脳裏に、人を喰らう半獣や狼の姿かたちをした獣がよみがえり、どつとこめかみに冷汗が吹き出る。まさか、そんな馬鹿な。どうしてもいろんな事がごちゃごちゃして、訳が分からなくなりそうだったから団員に付いていく。集団意識だろう、皆と居れば大丈夫、だいた

いそんな雰囲気動いていたと思う。

本部と寮を分けする分厚い鉄の扉の前で留まっていると、ふと隣の女に見覚えがある事に気がつく。

「大和——！」

「サリン！」

ようやく知り合いに会えた事で、情報が手に入る。

「これ、どうなってるんだ！」

「本部にM Aが出たのよ！貴方、確か五号室の住人よね？五階は確か……そう、図書館！図書館に向かって！ちなみに私は本部二階！」

「どうして区分けされてるんだ！？」

ようやく扉の解除が開きなだれ込む様に本務へ渡る。黒い団員達はそれぞれ手の平に武器を創造し走っていく。

「M Aが一匹ではないからよ！大量に発生したの！それに本部からの情報で平均B〜CクラスのM Aが少なくとも50体。ああ、早く、じゃあね大和！」

有益な情報を齎^{もたら}してくれたサリンは、細長いロングソードを手に階段を下って行った。自分も何とか意識を集中して、ライオンの紋章がついた剣を練りこみながら図書室へ走り出す。同じ方向へ向かっていく黒い制服も何人かいたので少しは安心した。

「——ちようどいいや」

ムシャクシャしてたんだ。俺もだいぶ精神的に成長したと思う。先程溜め込んだイライラを、MAで発散できるかと思うと、死への恐怖など吹き飛んだ。

図書室へ続く長い廊下を駆け抜けながら、剣を構える。自らが走る音だけが響いて、仲間が少ないのを実感した。先程、同じ方向へ走っていった団員の姿は見えない。

思わず、吐き気がした。白い壁に、大量の血液が付着していた。

ゆっくりと歩を止め、徐々に湧き上がる恐怖を押さえつける。廊下に、二つの死体。

その死体を満足そうに眺めるのは、背中からコウモリのような羽が飛び出た、口からは巨大な牙の突き出た、半獣だった。ゆっくりこちらを向いた顔は、人間になりきれなかったのか半分獣だった。

「……………っ！！」

震えて、手の平の剣にすがりつく。今は誰も、ケイトだって、助けてくれないのだ。自分で、全て自分で——切り抜けなければ。口の中に溜まった唾液を飲み干し、足をしっかりと踏ん張る。

半獣は血走った目を光らせ、口から白い涎が床にボタボタと落ちる。

図書館の入り口が半獣の脇からチラリと見え、中で凄まじい戦闘が行われているのがわかる。それは目の前の半獣を倒しても、図書館

の中にまだMAがいるという事実を示していた。

剣を掲げて、試すように角度を変えると白銀の刀身が光った。

コウモリ型の羽が大きく開いたかと思えば、次の瞬間半獣の牙が頬をかすった。

「くっ！」

尋常でない、その速さに体は反応せず、自らの血が壁に飛び散るのが見えた。

頬が痛む。ジンジンと、熱さを持って疼く。背後に回った半獣の気配が何倍にも膨れ上がり迫ってくる。肉を切らせて骨を断つ。

否——頬を切らせて、腕を断つ。

半獣の腕力と、剣の根元がぶつかる。

「——ぐ、あ！」

目元がスパークして、手の平が砕けそうになるが死ぬ気で踏ん張る。何メートルも押され靴の底から摩擦分の熱が登ってくる。

『主』

集中力があるにもかかわらず頭の中でまたライオンの声がした。折れる、折れる、剣が——思わず、剣ごと腕も手首も全てが捻じ曲げられそうになった。

『大丈夫です。この剣は決して折れない。剣と精神力は連動しています。貴方が孤独に負けたとき、それが敗北の瞬間です』

「う、うるせえ……っ！」

本当に黙って欲しい。孤独にもう負けそうだ。

『貴方の精神の象徴が私、レオンです。決して貴方は負けない。大丈夫です』

剣がこれ以上ないくらいに撓^{しな}る。エネルギーが、へし折られたらどうなるのだろう。

半獣の全開になった口がほんの鼻先にまで迫って、思わず目を瞑りそうになるが、その瞬間脳裏に親父の顔が浮かんだ。

俺が今負けたら、親父も負けた。ケイトの両親をやったのもこいつら。目の前の、こいつら。そう思うと。全身の筋肉が一気に隆起した。てこの原理を利用するように、奥歯を噛み締める。

細い柄を両の手で握りつぶし、憎悪の全てを剣の中へ叩き込む。悲しみは憎悪に変わり、憎悪は殺意に変わる。その瞬間がまさに今だった。絶対的な殺意は、やがて正義へ変わる。すると先程までの重圧が嘘のように半獣は吹き飛んだ。人間の三倍はある巨体が血まみれの壁に衝突し、弾けた。

もう、止まらない。俺は何時かのように剣を脇に抱えた。

激しい抵抗を手の平に感じ、剣が壁に突き刺さったのを認識する。と同時に、半獣が直ぐ傍にいたのを感じた。我ながら人間離れした

動きだったと思う。壁を崩壊させた自らの剣を引き抜くと同時に体を捻り半獣の牙を避ける。崩壊した壁に獣が衝突し白い粉を撒き散らしながら壁がさらにへこむ。

「——ッ！」

この時間はさして1秒ほど。あまりに素早く動きすぎたせいで足首や手首など細い箇所が痛む。しかし、反動で体のパーツがバラバラになるうとも、どちらにせよ目の前の獣をやらない限り俺の生きる道は残されていない。

まさに、火事場の馬鹿力だった。もう無茶苦茶だったのかもしれない。空気を切り裂くときの羽が振動するような超音波の後、青い液体が視界に飛び散り勢いよく顔に付着した。思わず目を細め、獣から距離をとるように後ずさる。しかし次の動作はなく、獣は悶絶しそのまま床に倒れこんだ。青い液体、どうやらMAの体液は青いようだ。

「……た、おした？」

血管が浮き出るまでに隆起した腕から、フツと力を抜く。カラン、と剣先が床につき、そのまま腰が抜けた。

「——」

緊張しきっていた全身が一気に緩み、ついでに涙腺も緩んだ。目の前で絶命したMAを見下ろしながら、へ垂れ込む。微かに、指先が震えているのが分かった。思考が白濁して、唇はカラカラ、背中には冷や汗が浮きでている。

初めてMAを、自分の力だけで倒したと思う狂喜の念と、握力がな

くなるまでに力を使い果たしたことへの恐怖感。たった一匹だけでこうなるなんて、まだ図書館にはたくさんMAがいるはずなんだ。しかも今までの知識から、MAは獣の姿に近いほど弱く、人間に近いほど強い。それならば今倒したMAは、そこまでの強さではないということになる。

それなのに、こんな腰抜け状態になって……。

しかし、戦いの場で気を抜くことは無用だった。何人かの団員が走ってくる。必死の形相で、連中は血まみれだった。それはMAではない。人の血。その中にはサリンの姿もあった。彼女の人形のような顔は、返り血のようなものが付着している。

「ヤマト！あんな暇そうね！？」

「は——！？」

馬鹿なことをいうな。俺はたった一人でMAを倒したんだぞ——。早口で、そんな言葉が口から飛び出る。しかしサリンは全く動じず、よもや顔をしかめた。

「そんなの当たり前よ！いいから、私達と来て！二階が大変なの！早く！」

促されるまま、立ち上がると全身に鋭い、噛み付くような痛みが走った。

「くそ……っ！」

ポンコツが、とばかりに自らの腕を殴る。さらに筋肉は痛んだが、二階に何があるかを思い出して、その痛みなどどうでもよくなった。

そう、二階には。

——ケイトが寝ている、医務室がある。

第十五話：剥き出しの思い

二階への階段を駆け下りて、長い廊下へと躍り出る。

「——ッ！！」

生臭い匂いが、途端に鼻から流れ込んだ。

両脇の壁にもたれかかるようにして大勢の団員が倒れていた。壁に血がべつとりとつき、それこそ、長い廊下は真っ赤に染まっていた。先程の比ではないほどに、そこは地獄絵図と化していた。医務室へ向かって走っていく団員達について行こうとすると、隣のサリンが俺の制服の袖を掴んだ。軽めだったが、それは確りとした意思を持っている。

「何だよ！？急がないと……！！」

すると次の瞬間、医務室のドアが吹き飛んだ。同時に医務室から逃げるようにして出てきた何匹もの狼が青い何かに跳ね飛ばされ、壁に打ち付けられ絶命した。

「……！！」

ただならないオーラに、立ちすくみ、目の前の光景を凝視した。青い何かとはクリスだった。冷徹な、氷よりも冷たく、闇よりも暗い、この世のものではない程の残酷なオーラを発しながら、クリスは倒れたMAを見下ろしていた。それはまるで——人間よりも、MAに近い、まるで共食いをしているかのような、そんな雰囲気だった。

「……ク、クリス」

よろよると、近づきながら、クリスの意識を確かめる。いきなりクリスは刀を持ち上げて、俺に標的を定めた。

「ま、まてよ、オイ！俺だつて――」

「……ケイトを傷つけるものは、全て排除する」

熱の籠っていない、絶対零度のような声で呟いた後、クリスは恐るべき速さで俺の懐へ入り込んだ。

「……っわー！」

「――死ね」

途端、爆発するようなエネルギーが吹き上がり、廊下全体に津波のように広がった。青い瞳がうねりを持って、俺の命をしとめようと迫ってくる。まさか仲間に殺されるとは思っていなかったから、反応の遅い体に苛立ちを覚えながらも、ここまで生き残ったのだ、今殺されたら洒落にもならねえと、渾身の力で剣を練りこみ寸でのところで青い刀を受け止める。

「――や、やめ」

壁に背中をつけ、目尻に涙を溜めて怯えるサリンを横目で見て、次に殺人鬼と化したクリスを見据える。不思議なことだが、俺は至って冷静で、体は十分に動いた。いや、動いたのではなく、動かした。精神が肉体を超越したらしい、殺されて溜まるか。

「聞けよクリス！」

目の前の、さながら青い炎の様な男に怒鳴りつける。この血なまぐさい場所にいたら、誰でも気が触れてしまうのかも知れない。そう思つて、少し気が楽になった。しかし、俺の言葉に反論するかのように圧倒的に強められた力に押され、分散するために一旦刀身を揺さぶり強引に間合いを取る。高い超音波のような音と共に火花が散つて、長い廊下に相反するように俺とクリスは佇んだ。

「俺はケイトを傷つけなんかない！」

苛苛として、声を荒げる。どいつもこいつも、一体何なんだ。勘違いも甚だしい。心の中で落ちていた波が、またざわめき立つ。どンドン、どンドン、あらぶる気持ちを静めるために、同じ事を呪文のように繰り返す。

「俺はケイトを傷つけてなんか、ない」

するとクリスは俺の言葉を遮るかのように太刀を壁に突き刺した。鈍い破壊音と共に、クリスは怒りを押し殺した口調で呟いた。

「…知っているか？」

腰が抜けたのか、床でへたり込むサリンを見て、クリスの威圧感はさらに増した。

「世の中には、女を不幸にさせる男が存在する」

「——は？」

なんのことかと、苛立つと、クリスは壁につきささっていた剣の柄に指をやり、握った。

「ものの例えだ。…俺には分かるのだが、お前はそれに該当する」

「そんな事…！」

「黙れ！」

本当に、そのときのクリスを一言で表せば凶器。狂気。武器がそのままの攻撃性で向かってくるような、そんな感じだった。

「自覚がないのか、ケイトを好きになるならケイトを守れるほどの強さを持つてからにしろ！」

まただ。どうしてこう、隊長もクリスも勘違いしてる？

「だから、俺はケイトのことなんざ——」

続きは、いえなかった。医務室のドアから、ケイトが出てきたのだ。目を伏せているから、表情はよく分からないし、クリスがすぐさま駆け寄ったから安心した。その代わりに床で震えているサリンに肩を貸して立ち上がらせる。

「……ねえ」

「どうした…？」

足取りが確かでない女の腰に手をやり、なんとか自分の疲れきった

体で支える。サリンは顔面蒼白だった。そんなに、怖かったのか。医務室へクリスとケイトが完璧に入ったのを見て、蚊のなくような小さな声でサリンは俺に耳打ちした。

「クリストフ・フランスには、関わらない方がいいわ……きっとその」

「何だよ？」

「それは…言えないけど…」

何かよく分からないサリンに呆れて、医務室には行かないほうがいいと思い、そのまま寮へ向かった。途中で何人もの怪我をして動けない団員を見つけて、救護班もやられたのかと、舌打ちした。MAの気配はもうない。どれだけの団員が負傷したのだろうか。

とりあえず動ける団員を何人が集めて、負傷者を一箇所に集めた。そうして、誰かが医務室から持ってきた包帯やら薬を負傷者の傷口塗りたいくる。自分自身、疲れているはずなのに、仮にかなり眠たかったのだが、そのまま働き続けた。

時期放送がかかり、MAは全滅したこと、死者は100人程（これはハンターズ団員が1万人なのを考えて100分の一がやられたことになる）、明日これからの任務について緊急で集会をかける事などを告げた。

ようやく落ち着いてきたサリンや負傷者の数を見て、自分も壁にもたれかかる。

「……はあ」

目を閉じて、微かな血の残り香を感じて、吐き気がした。

そうして、何か大切なものを忘れている気がした。

…シユラ・マーチス。あの子供も、医務室にいるはずなのだが。一瞬、不吉な考えが頭をよぎったが、ケイトとクリスと一緒にいたのだから大丈夫だろうと思ひ直す。

「……」

いや、やはり心配だ。重たい鉛のような体を引きずって、急いで二階へ向かう。医務室のドアは誰かさんが吹き飛ばしたから、中の様子は丸見えだった。

「……何をしにきた」

白いシートにくるまれて、まるでどこかの姫様のように眠りこけるケイトの細い指に、自らの指を絡ませて、クリスは怪訝そうにこちらを見た。

先程のような、混乱状態にはならないらしい。そうして、違っベツトにシユラが寝ているのを見た。安心して、駆け寄る。

「シユラ。おい。大丈夫かよ？」

俺に背を向けるような格好で寝ているシユラの背中に手をやる。

「――」

思わず、手をびくつかせる。一步下がって、寝ている小さな体を見下ろす。

「な、なんでこんなに…」

救いを求めるように、クリスを見ると。青い瞳からは透明な雫が溢れていた。雫は流れとなり、白い頬を伝う。

その光景に頭を打ちぬかれたように衝撃を受ける。あの、無愛想で仏頂面で、ましてや先程俺を襲ってきたクリスが、泣いてる。

「……」

喉を鳴らして、シユラの柔らかそうな指を握る。

——背中同様、氷のようだった。

「…シユラ…?」

どういうことだろう、これは。冷たすぎる。子供の体温なんて、俺達よりずっと高いはずだ。どうして、こんなに。

知らず、知らず、目の前の事実を脳みそが判断し始める。嫌だ、嫌だ——。今ほど、思考が止まればいいと思ったことはない。

「シユラ！おい、シユラ！」

揺さぶって、視界が一気に曇る。

「くそ、何で」

邪魔なんだよとばかりに、目の水を拭い、シュラの顔をこちらに向かせる。その顔は、青白くて、一切の生気を吸い取られたかのようにだった。何とかしようと、小さな胸に手を重ね、心臓マッサージを試みる。何度も、何度も、人工呼吸だつてした。それが俺に出来る、唯一の手段だつたから。

「無駄だ」

背後から聞こえた声に、思わず心臓が止まるかと思った。クリスの声は、まるでこの世の全てに失望したかのような響きだった。シュラの呼吸も、体温も、戻ることはなかった。

「…どういふことなんだよ」

「……」

ダメだ、落ち着け。そう念じてても、先程中途半端にあらぶったままの感情が一気にざわめいて、弾けた。

勢いよくクリスの首根っこを掴み、なるべく力を入れないようにして引きずり上げる。

「説明しろよ！何でシュラが死んでるんだよ！」

自分で放った言葉に、また悲しくなって、しかし自律しようと、歯を食いしばる。しかし、無理だった。ここでクリスにあたるのは、明らかに見当違いなのだ、どうしてそれが分からない。

誰か俺を止めてくれ——。しかしクリスの青い瞳は俺を止めようと

はしなかった。そのまま、絶望を受け入れたかのように伏せられていた。その代わりに、誰かの力ない手が俺の腕に触れた。

「……ヤマト、落ち着いて」

「——ケイト」

力ない微笑に。諭されたような、清められたような、まるで何かに抱きとめられたような、そんな大きなさを感じて、瞬時に指の握力は消えうせた。そのまま、体中の力がなくなり、膝から落ちる。俺に支えられるように立っていたクリスも同時に落ち、ケイトだけがベツトに座っている。

「私が、説明するから」

少し、周りが見えるようになるがそれでも目の奥が焼ききれそうに軋んだ。

「シユラはM Aにやられた」

”M・A”^{エム ア}。その言葉は特別な旋律を持ち、俺の記憶に刻み込まれた。頭の中のヴルブ・レオンがM Aを噛み付いて、引き裂いた。

「M Aに襲われた私を助けようとして、」

「——！」

この、言葉。一気に、高層ビルから飛び降りるような急降下感と共に、思い出す。ケイトは、また一つ傷ついた。そうして、思わず立ち上がった。

「ケイト」

このままでは、目の前の少女はおかしくなってしまう。本能的にそう感じた。自分のせいで人が死んだということは、自分が殺したようなものなのだ。経験したことがないから心底は分からないが、そのときはそう思った。

「私のせいなんだ、だから、だからシユラは」

錯乱状態に陥ったケイトに殴られても、どんどん、近づいた。華奢な肩を引き寄せて、壊れるほどに抱きしめる。暴れるのをそのまま押さえ込んで、ずっと抱きしめた。

「——や」

「ケイト、大丈夫だ」

それはまるで自分に言い聞かせるように。この腕の中の温もりが消えないように、クリスの目など気にしないで、そのままに。剥き出しになった自分の思いに驚いて、苦笑した。

俺はもう、駄目かもしれない。ケイト。ケイト、その言葉以外に、甘い響きを感じない。首筋から香る甘い匂いが鼻腔をくすぐって、思わず白い首筋に唇を落とした。

「——っ！」

ケイトが息を呑むのが分かった。かまわず、そのまま唇を滑らす。一旦彼女の顔を見ると、いくつもの涙の雫が頬を伝っていた。掴ま

れた手首を離せとばかりに揺さぶっても、所詮は男の女の力差。ケイトの細い手首を、俺は片手で束ねると困惑しきった目下のケイトを見つめた。

「…ケイト…」

俺は気づいた。いいや——本当は、ずっと前から気づいていたはずだ。自分が、目の前の少女のことを好いていることなど。ケイトに他のヤツが関わるたびに不快感を覚えていた。物事に執着しないはずのこの俺が。ロイス隊長に忠告されたとき、認めたくなかった。柄にもなく声を荒げた。そうしないと、本当の気持ちがあふれ出てしまいそうだったから。

第十六話：匂い

「何よ……離して——！」

怒鳴っても、嫌われても、今この体温を感じていたかった。

——寂しかったのかも、な。

長い睫毛に雫がついて、瞬かせるたびにさらに透明な水は目尻に溜まった。見かけよりも全然細い腰に手を添えて、そのままベッドの上に押した倒す。背後で、クリスの殺気のようなものが感じるが気にせず事を進める。

「やめ——……」

抵抗する気力はないはずなんだ。そういえば、ケイトは風邪引いてたっけ。頬を高揚させて、熱が苦しいのか息を荒げるケイト。寝込みを襲うとはこのことだな。思わず苦笑して、こんな自分に嫌悪する。

血の匂いに慣れてしまいそうな、自分。MAを殺すことに躊躇しなくなった自分。仲間が死んでも、他の痛み走る自分。知っているだろうか、脳は痛みを感じても他にさらなる痛みがあればそちらを優先させるらしい。

だとすれば今俺は『シユラが死んだ』という痛みを『少女の苦悩を共有する』という痛みで麻痺させようとしているのかもしれない。

「大丈夫だから」

目を見開いて、そのまま固まるケイト。頬を伝う雫を何度も舐め取って、そのまま見つめる。熱さを感じる。結局、この言葉に俺は逃げた。そういう理由にしておけば、今のこの行為を正当化できると半開きになったケイトの唇に、背筋がゾクゾクした。

——汚い自分に嫌悪して。次の瞬間クリスの蹴りが横腹に入ったことに至極感謝した。

「ぐっ…！」

床に転がる俺をまさしく鬼の形相で見下ろすクリスは先程の近いオラを出していた。

「お前…！自分が何をしようとしたのかわかってるのか…！」

耳が痛くなるほど怒鳴られ、心臓が疼くのを感じた。

何をしたか。言葉という道具に頼り、弱さやもろさを少女に預けた。助けてもらったのは自分だ。胸元を右手で押さえ、痛む心を握りつぶす。

「——つるせえ」

剣を形作って、目の前の長身に切りかかる。クリスは俺の行動を予想していたかのように、自らも瞬時に太刀を形作り抗戦した。

「やめ——お前だって、俺が一人MAと戦ってるときにケイトの傍

に居たんだろうが！」

懇願するケイトの声を掻き消すように、先程怒鳴られたのと同じ音量で怒鳴る。それを聞いたクリスは口元をゆがめて、不自然な笑みを浮かべた。

「ああ、だからどうした…？」

「お前——それなのにシユラー人も助けられないのかよ！？仲間もいたんだろう！？」

そうだ。どうして、ケイトを守るのにシユラが動く。

「あれは…っ！」

ガギンと、なぎ払われ、数メートル吹き飛ばされる。あまりの腕力に、先程廊下でよく殺されなかったと今更ながら恐怖が沸く。——恐怖？いいや違うな、それにも増すのは、憎悪と怒り。行き場のない感情は近くのものに当たることと発散するしかない。先程の感情はようやく解き放たれたように唸り始める。

「——あれは、誤算だった」

「誤算…？」

体中の産毛が逆立って、まるで獣になった気分だった。何か、今クリスがつまらないことを言ったら、即、爆発だ。

「ああ、まさかMAが——」

そこまで言って、クリスは我に戻ったように口を閉ざした。

「何だよ！？MAが何だってんだ！！」

「とにかく、その場にいなかったお前にとやかく言われる筋合いは毛頭ない！」

「——っ！」

この組織に入ってから、俺はもともと切れたら歯止めがきかない性格が益益表面化している気がする。ケイト、ごめん。やっぱり、お前のいうように俺は『自分で自分がコントロールできない人間』になりつつある。でも、それは至極当然のことだと思うんだ。

誰でも、この状況下ならそうするはずだ。事実お前がそうしたように。

「くだらねえ！！」

叫んで、クリスへ向かって突進する。医務室が広くてよかった。ケイトに被害が及ばないように。懐に入り込むのを許さないクリスのスピードについていくのは苦労したが、しかし動体視力は良かったのだろう、目が慣れて、徐々に剣がクリスという物体に近づいていく。逆もまた叱り。クリスの間合いの長い太刀は直に俺の腕を切り落とそうとハヤブサのように迫ってくる。息を呑む暇もなく、一瞬剣先が腕に触れる。慌てて避けるが、五cmほど傷のついた腕からは血が吹き出た。鮮血が飛び散り、痛みが走ったので思わず腕を押さえた。

「——っ」

さすがに、強い。けど――。一瞬、クリスが油断した隙に剣を翻し一番面積の広い胸を狙う。恐らく今の動きは一般人には見えもしない。

剣先は避けようと体を捻ったクリスのわき腹をかすめ、制服が見事に切れた。次こそ致命傷、と思い少しばかり距離を取った瞬間。戦いに水を差すかのように呑気な声が医務室に響いた。

「お前らー遊んでないで寮に戻れ」

「……」

パンパンと、両の手を叩きながらロイス隊長が入り口に立っていた。

「あーあーあー派手に扉吹き飛ばしやがってえ……ま、修理費は俺が出すんじゃないからいいけど」

降り積もった木の欠片を革靴で蹴り飛ばしながら、半ば呆れ顔のロイス隊長は顔面蒼白のケイトの元へ歩み寄った。

「ケイト、大丈夫か？熱は？」

突然目の前が日常的な雰囲気になったのだから、ケイトも驚くだろう。しばし呆然として、それから自らを心配そうに覗きこむ隊長に目をやった。

「あ、熱？熱は、もうちょっとだけしか――」

「ちよっと？どれどれ、見せてみる」

そういつて、ケイトのおでこに手をやると、大袈裟に表情を変えて隊長は叫んだ。

「何かがちよつとだ！！まだまだあるじゃねえか！ほら、早く寝ろ！」

「え、だ、大丈夫。ですから」

「いーから！」

そんな会話を聞いていれば、戦闘意欲も削がれるという者で。それはクリスも同じだったらしく、太刀を肩に乗せ上下させながら俺を見た。

「ここは一時休戦だ」

偉そうに。むかついて、自らの剣を消滅させながら返事する。

「当たり前だろ」

なんとかケイトを横たわらせることに成功した隊長は気だるそうに俺達を交互に見た。

「お前らなあ、よくそんな元氣残ってるよな、これが年の差かあ」
手をこめかみにやりため息をつく隊長に少しばかりの満腹感を覚えた。思わず我慢していた疲労が一気に体にやってくる。

「ん？」

そこでようやく、隊長はシュラに気がついた。獣に変身できるほどのだから、嗅覚は鋭いのだろう。少し鼻を動かし、その場で事態を把握したようだった。恐らく、嗅いだのはシュラから出る死臭だろう。

「…シュラ・マーチスだったか。死んだのか？」

俺は隊長の態度に愕然とした。何の気なしにシュラの死体に近づき、体の観察を始めたのだ。拳を握ろうとして、しかし自分の体にはもう、一滴の力も残されていないことに気づく。握力すら、ないのだ。ごつい手でシーツをめくり、内部を覗き込むと少しばかり眉を寄せた。

「腹部に鋭い切り傷。MAの牙を直に受けたらしいな」

「——隊長」

隣のクリスが、震えるような声で呟いたから、少し驚く。彼の横顔は、何かを後悔するようだった。ブロンドの髪がウェーブして、整った顔立ちは苦悩に歪む。呼ばれたのでクリスの方を隊長が向くのは当然の流れだ。しかしクリスは目を伏せた。

「……なんでもないです」

それを見た隊長は一瞬不審そうに目を細めたが、それ以上詮索することはなかった。

「…変なやつだなおい。じゃ、二人とも体を休めろよ！明日は、大変だ」

ヒラヒラと手を振りながら、恐らく他の団員の様子も見なければいけないのだろう、少し小走り気味に隊長は出て行った。

静かになって、感情の高ぶりも収まり、俺は気恥ずかしさで死にそうだった。自分は先程、ケイトを襲おうとしたのだ。それをクリスに怒られて、それにぶち切れて。身勝手なこと甚だしい。逃げるようにして医務室を後にした。ケイトの顔は見れないし、クリスの顔も見れなかった。最大の痛みが和らいだことで、シュラが死んだという現実が矢のように心に突き刺さる。

寮に戻って、自分の部屋に入る。鍵もかけて、ベッドに倒れこむ。無臭だった自分の部屋に、血の匂いが混ざった。それは自分の体に血が染み付いている証拠。

「……………くそっ！」

嫌になって、ラフな普段着に着替える。普通日中は制服を着ておかなければいけない仕組みなのだが、そんなものを今更気にしていられなかった。血の匂いやMAの匂いが染み付いた服は、廊下を巡回する洗濯用のワゴンに放り込んだ。

そうして、そのまま俺は深い眠りについた。苦しみのない、真つ暗で静かな世界へ——……………。

第十七話：放心

「……」

結局、ほとんど眠れなかった。常に精神が苛立って、安心して寝るなどとてもじゃないけど出来なかった。隣の部屋から、いつもの寝相悪さ故の蹴る音がしなかったことが、本当にシユラが居なくなつたの事を実感させて、意図しなくても視界が曇つた。

湿つた枕を掴んで、眺める。クリスは恐らく医務室でケイトの傍についてる。しばらくぼうつとして、髪をくしゃくしゃと混ぜた。ベツトから抜け出す気力もない……。窓から差し込むのぞかな日差しに苛立って、ガラスに向かつて掴んでいた枕を投げた。また横になろうとした瞬間、廊下で放送が流れているのが聞こえた。

『……よ。再度告ぐ。ハンターズBクラス以上の者は朝10時まで本部の司令室へ集合せよ。以上』

「……」

渋々起きて、クローゼットに手をかけた。

視界に色がない。心の中にあつた雫が零れ落ち、枯れてしまったようだった。

項垂れて、心臓の位置のシャツを掴む。昨日からずっと痛いんだ。足やら腰やら腕やら、外傷的なものも痛いけど、それよりももっと、深部の、奥のほうが凄く痛い。熱くなって、疼く。また曇り始めた視界を気にせず、予備の黒い制服を着る。

自分がこんなに、あの子供を好いていたなんてしらなかった。憎まれ口ばかり叩く、小生意気なガキだという意識しかなかった。なのに、なのに。

――ハンターズでは、人のために動いた奴から死ぬ。

――ハンターズとは死に捉われた集団。

――一人が死のうと、世界は何も変わらない。

「うつるせえ……！」

拳をクローゼットに叩きつける。ジンジンと、焼けるように苦しみが渦巻く。こめかみに冷や汗が浮き出る。頭の中で何重にも反響して響く声に、まるで十字架にかけられ拷問されているかのような錯覚をする。

「……ハンターズが何だっただ……！そんなに偉い組織かよ！この組織が……！」

何度も、何度も、クローゼットを叩いて、床に崩れこむ。目から落ちる大きな雫が、床に落ちて染みになる。

苦しい。苦しい、もう嫌だ。

父さんの次はシュラだ。次は何なんだ、俺の大事なもののばかりMAは浚っていく。

次は、次は――……。

「……っ！」

その先を考えるのは、やめた。

そもそもこんな組織に関わらなければ、あのときに盗み聞きなんかしなければ、こんな目にあわずにすんだのに。親父も空間に迷い込むことなんてなくて、あんな怪我を負わずにすんだのに。全部、全部俺を中心に死の連鎖を引き起こしてる気がする。

俺は今、死の中心に居る。

…死に掬われた者の集団という意味が、本当に分かった気がした。

よろよろと立ち上がり、一人本部へ向かった。

「よつと。さて、皆集まったか？」

司令室の中は黒い団員で埋め尽くされていた。隊長は一人デスクの

上へ昇り満足そうに辺りを見下ろした。

「さて——今日ここに集まってもらったのには当然ながら理由がある」

俺はほとんど聞いちゃいなかった。隣にはサリンと、いつぞやにあった変態が居た。名前はなんだったけか——ああ、ダンか。ダンなんとかってやつだ。彼らも、BかAなんだ。強いのか。

「昨日起きたMAの大量発生は必然として起きた事件だ」

隊長は真剣な眼差しで、団員達をじっと見た。

「今世界中でMAの発見件数が爆発的に増えている。それに伴い、もうハンターズという組織を隠し切れずにはいられない状態だ。俺にしてみれば、出来れば——もう少し後が良かったんだが。今日より、MAの発見が多い国では政府が正式な警告を出すだろう」

ここで、隣のサリンが手を挙げた。

「ん？何だサリン・ソンクラーか。言ってみろ」

「ハイ。政府は具体的にどのような処置を取るのでしょうか？」

隊長はこめかみを指で掻きながら少し考える素振りをした。

「ん……そうだな……政策は国によってそれぞれ異なるから、俺からは何もいえない。それよりも、俺達ハンターズがこれからどう動くかが重要だ」

悪戯っぽく笑った隊長は、俺と少し目を合わせた。別に視線を外したりしなかった、面倒くさかったからな。少し視線を交わして、隊長は何かを決めたように言った。

「……よし。まずBクラスだとかAクラスだとかでは分けない。こちらであらかじめグループのメンバーは決めておいた。それぞれの能力を照らし合わせて、過不足なくしたつもりだ。おい、メンバー表を配れ」

そう合図すると、隊長の傍の付き人のような人が白い紙を配り始めた。回ってくる紙を受け取り、空ろに見つめる。無気力状態だった。一応自分の名前を探す。

すると紙にはこう書いてあった。

【グループ1・特攻部隊】

- *ロイス・ターキン（隊長） S
- *グレイス・ケイト（隊長補佐） A
- *クリストフ・フランス（隊長補佐） A
- *サリン・ソンクラ（情報係） B
- *ハヤシ・ヤマト（情報係） B
- *ダン・ブラウン（情報係） B

「……知ってる奴らばかり……」

「そうみたいね」

独り言のつもりなのに、隣のサリンが覗き込んできたので思わず驚

く。

「なんか意図的なものを感じるメンバー表ね……………て、特攻部隊！？」

サリンが甲高い声を上げた。周りの団員が一斉にこちらを振り返る。

「あ……………」

隊長が野太い声で笑った。

「がっはっは！そうだよ、グループ１・特攻部隊だ。ちなみに数字が少ないほど強い奴らが集まってる。つまり強いM Aが現れたときに真っ先に特攻する奴らってことだ。さて、皆自分のメンバーを確認したか？したな？なら、解散！グループ１の奴らは残れよ！」

ザワザワと、密やかな会話を交わしながら団員達が出て行く。グループ１・特攻部隊と呼ばれた、俺を含める５人だけが薄暗い司令室へ残る。ケイトとクリスもその場にはいた。高熱を出しておきながら、２・３日で復帰するケイトの精神力に内心舌を巻いた。心なしか、目の下に隈くまが出来ている。

「…さーてと、特攻部隊、お前らは俺と一緒により危険な任務についてもらう」

資料を抱えて、隊長は六角形の銀製テーブルに座るように合図した。

「……………」

俺はまだ、頭の中に霧がかかったみたいだった。ずっと果てしなく

続く白い霧の中で、一人取り残されて。周りには誰も居ない、一人でこのモヤモヤの中を歩いていくしかない気がした。

「ヤマト？」

「……え」

心配そうに、覗きこむのはサリンだった。思わず頭を左右に振る。ロイス隊長は煙草をふかしながらこちらを見た。

「おい、ハヤシ・ヤマト。お前そのまま任務地に行ったら100%死ぬぜ？」

白い煙が、シューと蛇のように伸びた。別に、無気力の俺にそんな事を言っても無駄なのに。

「……きつと、疲れてるんだよ。ねえヤマト？」

向かい側に座ったケイトが、首を傾げるようにして同意を促した。どうかこの場の雰囲気と和ませようとしているらしい。その仕草が妙に慌てていて、俺は変な気持ちになった。

「……ケイト。放っておけ、そんな奴。どうせ任務に行けば疲れなんぞ吹き飛ぶ」

ロイス隊長が直線的な眉をより直線的にして、すっかり短くなった煙草を銀の灰皿でねじり消した。もう5本溜まっている。ごつい手の平は歴戦の戦士を思わせた。

「……さてと、俺ら6人はこれからある場所へ向かう」

第十八話：変化

特攻部隊。強大なMAが発生したとき、真つ先に現場へ向かい闘う部隊。つまり、一番――死に近い人々の集まり。

「アメリカのスラム街で、またMAらしき獣が数件目撃された。今回は政府からのじきじきに駆除要請だ」

ロイス隊長は空になったタバコの箱を握り潰して言った。隣に座っていたサリンが身を乗り出して大きな声を挙げた。

「でも！それなら別に特攻部隊の私達が行かなくてもいいんじゃない……」

静かな司令室は、皆押し黙ったせいで空気が重かった。最も、俺の心はそれよりも重かったけれど。乾いた心を潤す方法も見つからず、ただひたすら色のない世界を見ていた。

「……ところが。今回は今までとはちよいと訳が違う。どうやらスラム街まるまる、MAの巣窟になっちまってるらしい。緊急にスラム街から半径1kmの範囲を封鎖しているらしいが……それもどこまで持つのか。封鎖された周りに報道陣やらマスコミやら駆けつけてひどい騒ぎになってるらしい。政府はまだ、マスコミには発表させてないらしいがな……」

いつもはMAを殺せると聞くと、無邪気に喜ぶ仕草を見せていたケ

イトでさえ、隊長の話に顔を引き攣らせた。ダンは冗談じゃないとばかりに銀製のテーブルを叩いた。自慢の色男が、取り乱すのを見て俺は少しほくそえんだ。

「もちろん、我々と他の部隊も連れていくんですよね!？」

隊長は最後の一本を吸い終え、灰皿にねじり消すと足を組んだ。少し、気まずそうに視線をダンから反らし——苦々しそうに言った。

「……無論、俺たちだけだ。まず最初に……潜入し中の様子を探つてこいと、命令だ」

それはつまり——。意図せず、思考が勝手に結論をはじき出した。俺はシュラの死から初めて、現実の世界の言葉に動揺した。心臓の鼓動が早くなる。

「……我々に犬死をしろというのですか？」

ケイトが言った。病み上がりにも関わらず、その声は確りとしていた。その目は、凜として隊長を一心に見据えていた。思わず、腑抜けになっていた自分の気持ちを見透かされた気になって、苦しかった。ケイトは、シュラの死を目の前で目撃したはずだ。なのに、なんで冷静でいられる？それが、不思議で、憎くて、たまらくなる。

隊長は苛苛としながらタバコを見つけるためポケットに手を突っ込んだ。男らしい喉仏が荒々しく上下する。

「違う。犬死じゃない、ただの調査だ。俺たちの實力ならば、並大抵のMAに殺されることは、ない!」

サリンが自らの肩を抱え少し震えているのに俺は気がついた。艶やかな黒髪がぼつれ、色っぽく頬にかかっている。眉を寄せ、何かに耐える様な仕草を見せる彼女に――俺は見惚れた。部屋自体が薄暗いために、普段白い顔色が青白く見えてしまう。

「……ヤマト？」

ケイトの声がして、ゆっくりとサリンから視線を解く。ケイトは少し傷ついた様な顔をしていた。肩ほどもでの茶色のウェーブ毛が柔らかそうで、その透き通った目は不安そうに揺れていて、薄っすらと紅色に色づく唇は――。

「……！」

思わず、自分を制した。これから死ぬ可能性のある、重要な任務の話をしているにも関わらず、自分は女に欲情していた。この場で、ケイトの華奢な体を組み敷いてしまいたい。医務室であつたことの続きをしてしまいたくなる。

「さてと、時間の問題だからな。アメリカにすぐに向かう。ケイト」

隊長はタバコを買う小銭を確認しつつ、ケイトに目配せした。それを見たクリフがムツとした表情をするのを、俺は見逃さなかった。

「お前、熱はもう大丈夫か？」

ケイトは慌てて返事をする。

「あつ、はい！大丈夫です」

それを聞いたロイス隊長はにかりと、また男らしい笑みを浮かべ立ち上がった。それが合図かのように、皆立ち上がる。ダンはずっ青な顔でかたかたと震えていた。俺は不思議と、恐怖の沸いてこないことに驚いていた。前の自分なら。親父やシユラが襲われる前ならば、こんな任務絶対に出来なかった。でも、今なら——出来る。思い出すだけで、狂おしいほどに憎悪の感情渦巻くMAを殺す事が、俺の目的なのだから。

…血の匂いには、もう慣れてしまった——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4199b/>

HUNTERS

2010年10月8日13時06分発行